
七英雄物語 4

七英雄

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

七英雄物語4

【Zコード】

Z5216C

【作者名】

七英雄

【あらすじ】

怒りと悲しみのルキボル国政権争いも終わり、仲間と共にクラシエイカの待つアーガス国へと旅路を続けるルシア一行に新たな困難が降りかかる！それは意外な事態へと発展していく。疾風怒濤の英雄ファンタジー小説第4弾！

3人は遠い道のりを歩いていた。

ガルド会議が行われたバロゲニア神殿から、アーガス国を目指していた。

白い髪の若き青年、ハッシュ。元ゲルニア国將軍ファミリストン。そしてファミリストンの部下であるオキュラスの3人。

ハッシュの故郷であり、師であるクラシェイカのいる剣の国アーガスへ向かっていたのだ。

そもそも、絶望神の復活と、ハッシュを英雄がいるとゲルニア国へ行かせたのはクラシェイカの指示である。

ハッシュはファミリストンをその英雄と判断し、なんとか連れてくることになった。その途中、バロゲニア神殿にもう1人の英雄がいるというクラシェイカの指示で探すはずだったが、思わず突然の緊急事態に断念したのであった。

大量の絶望獣ジャムが神殿を壊滅寸前に追いやったのだった。とてもじやないが探す余裕はなかった。

3人は元気がなかつた。いつも馬鹿なことを言つているオキュラスでさえも。理由は2つある。

1つは、ファミリストンの部下であり、オキュラスの先輩であり、ゲルニア国滅亡から生き残り、一緒に旅を続けていたエグリアースが死んだのだ。恐らく絶望獣に襲われたのだろう。最期の言葉も聞けずに、無残な姿で倒れているのを発見した。手厚く葬つたが、動搖は隠せない。

もう1つは、同じく一緒に旅をしていた。子供3人、ボズとアリシェ、パール族のステューも行方不明になつていたのだ。混乱に巻

き込まれたのだ。だが、エグリアースと違い遺体が出てきたわけでもない。希望はある。

「もう少しだ」

誰に言うでもなくハッシュュが言った。

ファミリストンとオキュラスは返事もせずに頷いただけだつた。

エグリアースの死と、ボズ達の安否で気が気がしないのだろう。

その時、数人の男が、ハッシュュ達を取り囲んだ。賊だつた。

「へつ、へつ、へつ、おい、貴様ら、殺されたくなかったら、有り金と持つている物全部置いていきな、へつ、へつ、へつ」

賊の1人が剣をチラつかせて言った。

それを簡単に無視してオキュラスがファミリストンに話しかけた。

「本当にボズ達が心配ですね、將軍」

「うむ。しかしあの子達は、あれでしつかりしているから、大丈夫だと思うようにしてるのでがな」

「だといいんですけどねえ……」

そんな会話を聞きながら賊の1人は苛立たしく叫んだ。

「こらこらこら！俺らを無視するつてことは、命がいらないってことだな！おい！皆！やっちまえ！」

だが。賊の号令に誰一人反応しない。それもそのはず、賊の1人を残して全員逃げていたのだった。

「…えつ…」

賊は後悔した。気付くのが遅かつた。ハッシュュの持つている大きな剣。明らかに機嫌の悪そうなハッシュュの表情。

ハッシュュは静か大剣を抜いた。

青ざめる賊。彼は自分の死を覚悟した。

「心配だなあ…ボズ達…」

オキュラスが独り言を呟いた。

医療大国ルキボルの王位継承争いが幕を閉じ、3兄弟の次男、オークランドが国王となつたことは、各國中を駆け抜ける程の情報ではなかつた。やがてジワジワと知れ渡るだろつ。

各国の知りたい情報は、他国の内戦よりも、もっと重要なことだつた。

先のガルド会議で暗殺されたテスペラド大神官の後任問題。そして、父暗殺の罪で指名手配のお尋ね者になつてゐる4男グリークスの生死である。

最も、父暗殺という罪は間違ひであるのだが、今はそれを覆す武器をグリークスは持つていない。

後任問題も、ルキボル国のことではないが、普通は長男であるボーダーが継ぐべきである。しかし、誰もが知つてゐる事実。3男、ヴィジョンズが後継者に一番近い男だということを。

グリークスはなんとしてもそれを阻止しなければならない。そのためには仲間が必要だ。自分を英雄だと言つてくれるのであれば、それを利用しない手はない。英雄として、地位を獲得した時こそ、ヴィジョンズに対抗できるのだ。本当の父殺しのヴィジョンズに。

グリークスは利用すること、追われる身なので危険が付きまとつ申し訳なさを感じながら、今、仲間と共に旅をしてゐる。

英雄だと言つてくれた少年、ルシア。ルキボル国、新王オークランド。パール族のステュー、そしてステューと同じくらいの男の子ボズとアリシェという女の子。

ルシアはまだ謎の人間である。10代の少年だが、何かを悟つたようになつてゐる。彼がグリークスやオークランドを英雄だと旅に誘つてきたのだ。

ルシアには最大の謎がある。3重人格者なのだ。1人は普通のルシア。残り2人の人格は想像を絶する。太陽神の人格と対する絶望神の人格が宿っている。なぜこうなったのか、本人もわからないのだ。

国王になつたばかりのオークランドは、ルシアの誘いと、ルシアの身体に宿つている絶望神のことが気がかりで、王という立場もあるが、この旅に付いてくれる。回復魔法や医療に詳しい彼は、戦いで傷ついても対応してくれるだろう。心強い仲間である。

子供3人、ステューとボズ、アリシェ。どういう組み合わせなんかわからないが、ガルド会議の混乱に巻き込まれたようだつた。

グリークスには特に理由など聞く気もなかつたのだが、ボズがこの旅の間、ずっと話していた。滅亡したゲルニア国で何があつたのかを。そして、英雄と呼ぶに相応しい自国の将軍と白き髪の戦士のことを。

「……でね、その白い髪のお兄さんがね、あ、ハッシュさんがね、大きな剣を振り回して、化け物をバッタバッタと切り倒して……」
もう何度目になるだろうか、ボズの話に誰も耳を傾けていない。ステューに至つてはうんざりしている。実際ステューはあの場では敵だったのだから、違う意味で聞きたくないかも知れない。

「ボズ、聞き飽きたよ、他の話はないのかい？」
たまらずグリークスが言った。

オークランドとルシアは苦笑いをしている。元々気を使い過ぎる2人である。本心はグリークスと同じであつただろう。

「えへ、これからなのに～」

残念そうに言うボズにステューが口出しした。

「リサを逃がした時の話をしろよ」

グリークスは頭を抱えた。このやり取りも何度も聞いているからだ。

無口なステューが最近になつてよく喋るようになった。ゲルニア国の戦いで兄弟を亡くしたせいで心を閉ざしていたのだが、段々と開いてきている。もしかしたらボズのおかげでもあるかもしれない。

「むむむ…同じことを……。ああ、いいよ、話してやるよー・ヌアリストっていう奴に弓矢をわざと外れるように……」

「いや、リサを逃がした所の話をしろ」

リサとはボズ達が知り合つた少女で、ガシーベ国人間である。彼女は何を考えているかわからない子だつた。だが、その正体は、絶望神四天王の1人だつた。逃げたりサを追いかけたボズだつたが、健闘虚しく逃げられてしまつた。

「この……！」

ボズがステューに飛び掛りつとしたところをオークランドが止めた。

「まあ、まあ、ボズ。気にしない、気にしない」

「でも、ステューの奴、腹立つんだよ。オークランド王、言ってやつてよ~」

オークランドの顔が引きつった。

「あ…あの、ボズ？『王』とか付けなくていいから」

一行は、アーガス国へ向かつていた。

クラシェイカの指示通り、ルシアは英雄を探し当てた。現状の目的は達することができたのだ。一旦アーガスへ戻り、再びクラシェイカの指示を仰ぐために。

ルシアの前にはボズとステューが言い合いながら歩いていて、その後にグリーケスが続いている。

何気なくルシアは振り返つた。後ろにはオークランドが歩いていた。目が合つてオークランドは微笑んだ。

「どうした？ルシア」

「……え……」

そう言いかけた時、とてつもない違和感がルシアの身体を雷の痺れのように伝わった。この場に絶対的に足りない何か。

「オークランドさん、ストラングは何処です？」

「ん？ストラングなら、後ろに…」

オークランドは振り返った。

ストラングとはオークランドが幼少の頃から共に成長してきた馬である。オークランドが成長し、恩師ペッヘルから貰い受けた愛馬。動物とはいえ、政権戦争の辛い時期にいつも一緒にいてくれた。オークランドにとってみれば、立派な家族であり仲間なのだ。

「……ストラング？」

その愛馬ストラングが振り返った先にいなかつた。姿形消えてしまっていた。

ルシアもオークランドも更にその先の展開に緊張が走った。ストラングが消えていることは確かに問題であるし、心配すべきことである。

それよりも、もつと大変な事態が目の前で起こった。愛馬ストラングは、アリシェを乗せていたのだった。

目の前で親を絶望獣ジャムに殺されて、声を、言葉を失った彼女は呆けて心ここに在らずの状態だった。何か起こったとしても叫び声も上げられなかつただろう。

「アリシェ？！」

オーケランドの声に、前方のグリーケス達も振り返った。

つづく

「ど…どうことなんだよ！アリシエ！アリシエ！」

真っ青な顔でボズは何度も呼びかけたが当然返事はなかった。突如、オーランドの愛馬ストラングが消えてしまった。…となると一緒に乗っていたアリシエも同じ事だった。

「誰も気付かなかつたのか…」

グリークスが考えを巡らせる。

オーランドも不可解な表情をした。訓練されたストラングがいなくなるなんて。

「蹄の跡があるんじやないか？」

グリークスが言った。

「そうだ、足跡だ」

ボズは真っ先に慎重に探し出した。それは容易に発見することができた。

足跡は南の方へ進んでいた。

「この先に確か港があつたはずだ」

グリークスがその方向を指差した。少し遠くに確かに港らしき場所が見える。小さな港町だ。

「そうですね、足跡がそちらへ向かっているのであれば、行くしかないですね」

ルシアの言葉に全員が同意し、一行は急遽港町へ方向転換した。

その町は、ルキボル国内にある港町だつた。

各国には大小関係なく必ず一つは港町がある。国内貿易や旅を快適に行うためだ。

このパルス町も、同じような理由で作られた。商人、行船、漁船、活気に満ち溢れている。

ここへ運ばれた物は、一部の限られた人間が護衛を付けてルキボル城内や各国へ運ばれる。町人はオークランドが王位を継承したことは知っているが、あまり顔を知っている者は少ない。

それが良いのか悪いのか、町へ入ってきたオークランド達をただの旅人と見なされていた。

時折、「あつ」と驚かれることがあったので、オークランドはなるべく顔を隠すように服を着込んだ。

「すごいなあ……」

ボズが感心して声を出した。あまりにも活気良さに驚いているようだった。

グリークスが並んでいる商人の近くへ寄った。

「へい、らつしゃい、旦那、今日は良い物仕入れてますぜ。ガシーベ国で売られている化粧でさあ、彼女へ贈り物すれば喜ばれること間違いなし！どうです？」

グリークスはいらないと手を振つた後に小さな声で商人に囁いた。「情報を買いたいのだが…、誰か知らないか？」

商人の顔つきが変わった。

「へえ、旦那、何やら変な雰囲気ですね、ここで情報なんざ、大したモンないです」

「そうだろうな。けど、たつた今起こつたこと出来事なんだ」

商人は笑みを浮かべた。

「なるほど…。その路地を右に曲がった所に男の老人がいる。その老人に『海は今日も荒れそうだ』と伝えてください。それが合言葉でさ」

グリークスは礼を言い、謝礼金を払つた。

「毎度つ」

愛想良く商人が手を挙げた。

「何處にも色んな情報を持つてゐる人間はいる。その情報を売り物

にしている奴もな。ああいう場所で長く商売している奴は、そっちの方も詳しいってことさ」

グリークスがボズに説明した。

「へえ……」

ボズは純粋に感嘆の声を出す。

商人の言う通りに路地を曲がると男の老人がいた。グリークスは老人に近づき、例の合言葉を言った。

「……何が知りたい？ここには口クな情報はないぞ……」

「俺達の連れの女の子が白い馬と一緒に消えた。足跡がこの港へ繋がっていたのだがな……」

老人の眉がピクリと動いた。

「……そんな女の子の情報は入ってきちゃあいないが……、どういうことかは察しがつくわい」

グリークスが金を渡した。それも值踏みされるような金額ではない。ある程度は遊んで暮らせるくらいの額だった。

老人は話しだした。

「多分、その子はバリュアス国へ連れていかれたと思う。美食の国だとか色々言われているが、裏では相当胡散臭い事をしているようだからな」

「なぜバリュアス国なんだ？」

ボズの問いかけに老人は言い難そうに首を振った。話したくないようだった。いや、むしろこれ以上のことを知っているということ、喋るということが命を危険にするものだということをわかっている素振りだった。

老人は、よいしょを立ち上がり、その場から離れようと歩き出した。

「ところで、お前さん達、ワシのことをビリで聞いた？」

「…あの先にいる商人達の1人だ」

「そいつらは、恐らくバリュアス国に通じてる者だ。お前さん達も氣をつけるがいい」

老人は去つていった。

路地から出でぐると、数人の屈強な男達が、グリークス達を取り囲んだ。それも憎しみのこもつたギラついた視線だった。

「あんたら、見ない顔だな」

男の1人が脅すように言った。

「さつきそここの商人から聞いたが、変なことを嗅ぎまわつているそ
うじゃないか。何を探しているのか教えてもらおうか」

大抵の者なら、この時点で恐怖し、洗いざらい吐くであろう。そ
の内容によつては、半殺しの目にあつて道端にでも捨てられるだろ
う。

だが。

ここにいる、ルシア、グリークス、オークランド、ボズ、ステュ
ーの5人は違つた。

命を懸けた先の政権争いで戦いで一皮剥けたのか、余裕を持つ
て対峙することができた。

動搖したのは、男達の方である。ボズやステューといった小さな
子供までもが、困った顔でこちらを見ている。そんな状況ではない
はずだ。もつと驚きや恐がるべきである。初めての体験に男達は戸
惑いを隠せなかつた。

そんな男達の不安を増幅させる言葉がボズの口から出た。

「てゆーか、おじちゃん達、バリュアス国へ行く船を教えてよ
何食わぬ表情でボズが言つた。

つづく

クラウボは、このパルスという港町で産まれて、ここから外に出たことがなかつた。漁業を嘗んでいた親の仕事に共感を覚えることが出来ず、口クに勉強もせずに悪い仲間と付き合つようになつた。その仲間の内の1人が用心棒風情の仕事をしていったことがきっかけで16歳からこの世界に足を踏み入れることになつた。

…といつても世界を知らないクラウボにとって自分自身は大した存在ではないかもしない。だが、それでもいいと彼は思った。ここで恐れられる存在が気持ちいいし、まるで自分が一番になつたような気さえ起つさせる。

それから、6年の月日が経つた。

22歳になつたクラウボは町の中で最も恐れられている人間なつていた。町のゴタゴタは全てクラウボ絡みの事件だし、ゴロツキからは慕われるようになつた。

バリュアス国の方に取り入つたのもクラウボだつた。何をしているのかは詳しくはわからないが、金になる。定期的に人を誘拐してバリュアス国へ連れて行く仕事も引き受けていた。

今回も運良く大人しそうな女の子が馬に乗つていた。しかも、その一行の一番後ろときている。用心が甘いとクラウボは思った。長年の経験でどんな馬だろうと、警戒されずに音も立てず連れてくる技術を身につけていた。

当然旅の一行は手がかりを捜しにこの町へ来るはづだ。もう遅い。既にバリュアス国への便船は出港したのだ。馬も女もその船に乗つている。

しかし、クラウボは不安になる。女の子を捜しにきたこの一行を脅して町から追い出すつもりだったのだが、全く引かない一行に圧倒されている。それも、堂々と意見を言つているのは子供なのだ。クラウボは世界の広さを実感し始めたと同時に手を出してはいけない。

なにものに手を出したのではと焦りを感じた。

「ねえ、おじちゃん、早く教えてよ」
ボズが再度クラウボに聞いた。バリュアス国行きの船を教えてくれと言うのだ。

「この状況で簡単に言えることが不思議でたまらない。余裕を出しているのか、もしくはただの馬鹿なのか。

舐められては下の者に示しがつかない。クラウボは叫んだ。

「馬鹿か、クソガキ。はいそうですかつて教えられるわけないだらうが！」

「でも、あのおじちゃんから情報を聞いた途端、こうなるってことはわあ～」

クラウボの怒鳴り声に全く耳を貸さずにボズは喋り続けた。

「そうですね。情報は嘘じやないってことです。間違いなくアリシエさんはバリュアス国へ連れて行かれた…」

今度は黒い衣を着ている少年ルシアがボズの言葉に続いた。何かを悟ったような物言いである。

「こいつもか…とクラウボは思った。

「だからそれがどうした？あ？お前ら！」から生きて通れると思つの……」

クラウボが言いかけた瞬間、仲間の男の腕があつさつと飛んだ。

「ぎゃあああああああ」

「なつ、なんだ？どうした？」

慌てるクラウボにもう一人の子供、ステューが近寄ってきた。驚

くことにその子は片腕でしかも残っている腕が刃に変化している。

先程仲間の腕を切り飛ばしたのは、この子供だった。クラウボは青ざめた。

ステューは明らかに怒っていた。例え短い期間だったとはいえ、一緒に旅をしていた者が突然いなくなつたのだ。それも、理不尽に

「見知らぬ国へ連れて行かれた。怒らない理由などない。感情的にス

テューは攻撃を仕掛けたのだ。

「…バリュアス国への船を出せ。さもないと…ここにいる全員皆殺

しだ」

その本気の目を見てクラウボの背筋は凍りついた。自分達がアリシェを誘拐したなどと口が裂けても言えるわけがない。それは自分の死を告白しているようなものだ。

止血の治療を始めた。

でも、今は本当に日本語でしゃべるんです。教えてくれませんか?」「すみません

クラウボは命令して小さな船を用意させた。一刻も早くこの状態から逃げ出した一心だった。

用意出来た船に、ボズやルシアが乗り込んでいく。グリークスがクラウボにいきなり話しかけた。

「バリュアス国まで頼むぞ」

そう言ってグリーケスは先に乗り込んだ。

「…は？何言つてやがるー。」

クラウボは聞き間違えたかと思ったが、間違いではなかつた。バリュアス国まで頼むと言われたのだ。それはつまり船に同行してバリュアス国までの航路を依頼されたようなものだつた。

俺達はノリでアドバイスの道が正確にわかるない
からね。ちゃんと金は払つ
いるんだ。ちゃんと金は払つ

グリークスは当たり前の口調で言った。

クラウボは船の運転が出来ないわけではない。親が漁師であつた

ため船の運転技術は嫌でも知っていた。

「ちょっ…なんで俺が…」

抵抗しかけたクラウボだつたが、すぐに諦めた。後ろでステュー
が目を光させていたからだ。断ればあつという間に切られそうだ。

こんな形で初めて町から出ることになるとは思いもしなかった。

観念して船に乗り込んだクラウボを仲間達は哀れな目で見送つて
いた。

全員が乗り込み、船はバリュアス国を目指して出港した。

「待つてろよ～！アリシエ～！」

ボズが大きな声で叫んだ。

予想外の展開で一行はバリュアス国へ向かう。

この先にとてつもない暗黒の事態が待ち受けていることも知らず
に。

↓ 第1章 美食の国へ 終 ↓ 第2章へつづく ↓

バリュアス国は、3国ある島の一つで今から40年前に建国が認められた国である。8国の中では一番遅い国であった。

元々のこの島は人口が僅か200人程度の島であったのだが、経済的には非常に潤っていた。その理由としては食材の豊富さ。環境のせいなのか、この島から取れる食材はとても貴重でどこからでも必要とされたために、貿易で大成功を収めていた。

島長フーティーは、機会を逃すことなく商人として蓄えをしていた。フーティーは高齢だったが人生を見極めていることはなかった。

野心家だったフーティーはその莫大な財力をバロゲニア神殿に寄付した。その見返りとして、バリュアスという島を国として認めさせたのだった。

ガルド歴870年、バリュアス『国』が誕生した。

目的を達成した安心感からか、フーティー王は病に倒れ、この世を去る。噂では110歳だったというが、実際は97歳だった。それも、日頃の健康食材のおかげだろう。

次期王になったのが息子のブロウフィッシュ。

野心はあるがあまり表立つことがなかつた父フーティーに反して、ブロウフィッシュは逆だった。張り裂けんばかりの野心は彼の性格そのままを表していた。横暴で、我が儘で、利益のためなら、自分自身のためなら、どんな汚いことでも平気でやつてのける男である。更に厄介なのは、自分で指示したにも関わらず、その責任は負わないという指導者として有り得ない人間なのだ。

そんな国にアリシェは連れ去られた。何もない方がおかしい。何か別の邪悪な理由が隠されている。ルシア達一行は不安を抱きつつバリュアス国へ向かつて行つた。

港から出発して半日が経つた。そろそろバリュアス国に着く頃だ。クラウボは面倒臭そうにグリークスに報告した。

わかつたとグリークスは言つと、ルシアやオークランドにも伝え
て上陸の準備を始めた。

後悔の念がクラウボの頭を駆ける。喧嘩なんか売るんじやなかつた。いや、もつと先の話だ。アリシェを誘拐するんじやなかつた。世間知らずな井の中の蛙状態のクラウボに欠けていたのは、腕力でも権力でもなく、人の見る目だつた。

まあ、どうでもいい。クラウボは溜息をついた。グリークス達をバリュアス国に港で降ろして、さつさと帰るだけだ。クラウボは既にそう決めていた。

だがしかし。それは甘い考えだつたということを思い知らされる。結果、自業自得ということになるのだが。

港に着いてすぐクラウボに對して話しかけてきた男がいた。顔見知りのリオだつた。変なことを言わなければいいが……とクラウボは不安になる。リオはクラウボの行いの全てを知つてゐるし、無神経な男だつた。周りを見て何かを悟るということなどあるわけがない。「おう、クラウボじゃねえか。いきなりどうしたんだ？ てゆーか、お前にここに来るの初めてじゃねえか？」

今回だけは、リオの人懐っこくて明るい性格に苛立しさを覚え
る。

「あ……ああ。まあ、外の世界も見ておかないとな」

常日頃から思つてゐる願望をつい口にしてしまつた。自分に余裕がない証拠だ。

口数少なく話を終えて、クラウボはグリークス達の方を向いた。「さ、降りてくれ。港を抜けた先に城があるはずだ。後は勝手にしてくれ。ま……まあ、さつきのことは謝るから

心にもないことを簡単に言える。連中ともう少しで別れることが出来そうなので段々と余裕が出てきたのだろうか。

何も言わずにグリークス達は船を降り始めた。

そこへ再びリオがやってきた。

「そういやよ、さつき恐がってるのか無口で静かな女の子が連れてこられたよ」

クラウボは青ざめた。ボズが敏感に反応する。

「あれはお前の仕事だろ？なかなか良い物捕まえてくるじゃないか」肩を叩くりオの手をクラウボは跳ね除けた。

「な…何言つてやがる。俺がそんなことするわけねーだろが」

「はあ？ だつてよ、クラウボの仕事だつて連れてきた奴が言つていたぜ」

絶望的だ。クラウボは脂汗が出てきた。ゆっくりと振り返った。怒りを露わにしたボズ。驚きを隠せないオークランド。やっぱりと見抜いていた表情のルシアとグリークス。そして、片腕を刃に変化させて今にも斬りかかるとしているステュー。

「帰すわけにはいかなくなりましたね」

冷静にルシアが言つた。その言葉に全員が頷いた。

「だから、アリシェを何処に連れて行つたのさ、この誘拐魔！」

ボズがクラウボに怒鳴り散らした。

「知らねえよ、本当に。俺の仕事は…その…捕まえるだけ…だから

れ」

バツが悪いようにクラウボは下を見ながら言つた。

ステューの刃がクラウボの喉に向けられた。

「…だったら、その辺で聞いて来い、聞かないのなら、殺す」

ステューの本気とも取れる言葉に誰も止める者はいなかつた。それが恐怖感を増幅させる。

「わ…わかったよ、聞いてくれればいいんだろ」

クラウボは覚悟を決めた。まずは、話しやすい相手からだ。クラウボはリオがいる場所へ足を進めた。

「おいおい、なんだよ、あの連中は？」

リオが心配そうに言つてきた。

これは真実を話す機会だ。幸い距離があるために話しそうも聞こえない。

「いや、実はな……」

クラウボは事情を話す。

「……全く……面倒なことしゃがつて」

「すまねえ」

「だけど、俺も城に連れて行くつてこと以外知らねえんだ。秘密秘密ですよ」

リオは頭を搔きながら言つ。

城に連れられてることとは、かなりの事だとクラウボは理解した。

「でも、まあ、安心しなよ、クラウボ」

リオは笑みを浮かべる。

「え？」

「この港の用心棒集団に、奴らを痛めつけるように依頼しておいたからな。最初つから怪しかつたんだよな、あいつら」

「い……いや……それは……」

クラウボはつい少し前にあつた出来事を思い出した。

心配するクラウボを尻目に、ルシア一行はあつといつ間に、ガラの悪い奴らに囲まれた。

「またかよ……」

ボズがうんざりして言つた。

「あんたら、見ない顔だな」

囲んでいる1人の男が低い声で言つた。どこかで聞いた台詞だ。

クラウボは頭を抱えた。これから起こる結末を予想出来たからだ。自分が喧嘩を仕掛けた時と台詞までそつくりである。

オーランドとグリークスが顔を見合させて頷いた。ルシアも頷いた。ボズも困った顔をしながら頷いた。

それを確認したステューの腕が刃へと変わり、キラリと光った。

つづく

「それで？アリシェが連れて行かれた城へ案内してくれるんだろう？」
ボズが、顔を腫らしたりオの顔を眺めて言った。

リオの手配で用心棒達をルシア一行にかけたまでは良かつた
のだが、こんな普通の奴らが強いとは思わなかつた。

それも、片腕のステューの強さは子供のくせに信じられない程の
腕だつた。用心棒達はあつという間に倒されて、手配したりオのこ
とを簡単に吐いた。かくして、リオは捕まり、お仕置きで殴られた
のだつた。

「う…あ、ああ…」

リオはチラリとクラウボを見た。助けを求める視線だつたのだが、
クラウボのビうすることも出来ないといつた表情を確認して、觀念
した。

「決まりだ。早速行くぞ」

グリークスが立ち上がつた。

グリークスの心境は複雑だつた。バリュアス国といえば、彼が好
意を寄せているルリードという女性がいる国なのだ。ルリードは、
ブロウフィッシュ王国の右腕というべき側近である。こういつた状況
でこの国にくることは正直不本意であつた。

もしかしたら、バリュアス国の人たちはルリードの命令
かもしれないのだ。グリークスは一刻も早くその疑いを消し去りた
くて仕方なかつた。ある意味、ボズよりも誰よりも真相を知りたい
のかもしれない。

「よおお～し！早く行くよ！みんな！」

ボズが大声を出して、グリークスの後を追つた。

「とにかくまずは行くしかないですね」

ルシアとオークランドはお互い話しながら歩き出した。

「お…お前、本当にやつかいな奴らを連れてきやがつたな」

リオがクラウボを睨む。

「馬鹿言え、勝手に喧嘩売つて勝手にやられてるのはそつちだらうが」

クラウボも負けじと言い返す。

そんな2人の言い合いに全く関心のないステューは、2人の背中を押した。

「…早く歩け」

リオとクラウボは渋々従うしかなかつた。

リオの人脈で荷馬車を用意することが出来た。馬を操るのはクラウボの役目だつた。馬を扱うことにかけては右に出る者がいなからだ。逃げないために、ステューが隣に座つて付き合つことになつた。しかし、クラウボだけでは体力がもたないので交代制に決めて、リオを含めた残りの5人は荷台に乗つた。

バリュアス城へは、2日はかかる。途中に村や町があるので、そこで休憩を取りながら向かうことになる。

荷馬車はバリュアス城へ出発した。

「そもそも、なぜ誘拐するのですか？」

出発して少し経つた頃、单刀直入にルシアがリオに質問した。

リオは困った顔をして、知らないと言つた。

「いや、本当に、知らないんだ。まあ、噂は…」

…と言い難そうに下を向いた。

「なんだよ、言えよ！アリシェをどうする気だ」

顔を真つ赤にボズが怒鳴つた。

「色んな噂があるんだ。奴隸や家畜として扱つたり、プロウフィッシュの悪趣味につき合わせられたり…」

リオの何も考えずに出る言葉にボズの身体が怒りの興奮で震えだ

した。

「他にも… 美食の国といつからには、常に『食』を追求しなければならない。なんでも人間の女の肉は美味しいという噂が…」

グリークスの腕がリオの首を掴んだ。

「…黙れ、クソ野郎」

「『ほつ、な、なんだよ、』『うえ、』『ほつ、』聞いたのは、がつ、そつちだらうが…」

慌ててオーランドが止めに入る。剥がすようにグリークスの手を外した。ボズは怒りを飛び越えてるようだ。

「リオさんも、言い方を考えてください。噂でしょ？」「

オーランドが落ち着いて聞いた。

「ま、まあな、あくまでも噂で、実際にそういう目にあつた奴や家族はいないしな」

首もとを擦りながらリオは苦しそうに続けた。

「でも、今から言つ噂が一番信憑性高いんだけどな。人体実験をしてるつていう…な」

声を潜めてリオは言った。

ボズの動きが止まつた。

人体実験…。

ボズには覚えがある。

かつて滅亡した故郷ゲルニア国。その王であるセラミスが、人体実験を繰り返し、化け物を生み出していたことを。

可能性は高い。現実にその実験をしている人間が身近にいたのだ。リオのいう信憑性は間違つていないかも知れない。

「そこの馬車、止まれい」

突然大きな声が響いた。

周りを大勢の兵士に囲まれていた。さすがに逆らうわけにはいかない。クラウボは必死で馬を止めた。

兵士達の中から、大きな丸々と太った丸男がのつそと前へ出てきた。

「貴様ら、旅の人間か？」

丸男は高飛車な物言いでクラウボに聞いた。

「ええ、そうです」

「何処に行く気だ？」

「こ、この先の、バリュアス城へ」

丸男の圧力にクラウボは極度の緊張を強いられた。

「何をしに？」

クラウボは言葉に詰まる。まさか、誘拐された知り合いを取り返しにいくなどとは言えない。証拠も何もないのだ。決め付けるわけにはいかない。

「観光ですよ」

荷台からルシアが顔を出した。

「観光だと？」

丸男は怪しそうに睨んだ。

グリークスはお尋ね者であるし、オーランドは一国の王、バリュアス国の人間であるリオを出すわけにはいかない、更にボズは子供だ。ここはルシアが行くしかなかつた。

「ええ、そうです、美食の国と言われている食事を是非堪能して、ここまで来たのですが、何かいけないことでもあるのですか？」ルシアの堂々した態度の丸男は少し腰が引けた。

「うむ。実は港の方で、見知らぬ一行に襲われた者がいてな、調査中なのだ」

それは明らかにルシア一行なのは間違いないのだが、事情はかなり違う。襲ってきたのは向こうのはずだ。

「ま、いい。止めて悪かった。行くが良い」

丸男は片手を上げて馬車の通り道を作つた。

馬車はゆっくりと進み出した。上手く切り抜けたと思つたが、事態はそう簡単にはいかなかつた。

リオがこの時とばかりに荷台から飛び降りたのだ。

「あつ」

ボズの声。

「こいつらです！」といつらが犯人です！私は脅されてここまで連れてこられたんです……！」

リオが泣き叫ぶ。

「あ、あいつ」

クラウボが言つた。内心自分も同じ事をしたいと思つた。

「出せ、早く、全速力だ」

ステューがクラウボに指示した。

「はあつ……」

クラウボの動きに合わせて馬が勢いよく走り出した。

「追えつ！追えつ！」

丸男の叫びが後ろから聞こえた。

「何処に行つても追われているような気がするんだけど」ボズの一言に全員が同意した。

つづく

バリュアス国 の島中心に堂々とそびえているバリュアス城。周りを町で囲まれた城である。

ブロウフィッシュユ王は下品な笑い声を発していた。

「ぶわつはつはあ～」

兵士や側近の人間はその笑いに慣れてしまっているが、他国の者が聞くと違和感極まりなく不愉快な気持ちになるであろう。

「おい、そろそろか？」

ブロウフィッシュユは近くにいた大臣に話しかけた。

「ええ、もうすぐでござります。明日には届くでしょう」

大臣は答えた。

「そうか、そうか、よし、よし、楽しみだわい。では、祝いに盛大な宴をひらくぞ、準備をせい」

ブロウフィッシュユは醜い笑顔を見せてもう一度下品な笑い声を発した。

疾走。

ルシア達が乗っている馬車は、限界を超えたと思えるくらいの勢いで走っていた。

必死で手綱を持つのはクラウボ。追つ手の追撃をかわすのに精一杯だが、荷馬車と馬を比べること自体が間違っている。馬車はみるみる内に追いつかれた。

「どうか、あんたらなんとかしてくれよつー俺にはこれが限界だ」クラウボが叫んだ。どんなに腕が良くても馬の能力や重さも加わつてゐる。今のクラウボの実力だとこれが頭打ちだ。

「ここは僕の出番だね」

ボズが胸を張つて前へ出た。オークランドから貰つた弓を手にし

て。

「そうか、ボズ、頼むよ」
オーランドが言った。

「ボズ、馬を狙え。お前の力だと撃ち抜くことは出来ないが、驚かせるこことは出来るはずだ」

グリークスがボズの肩に手を置いた。

「うん、わかった」

ボズは荷台から乗り出した。

「あいつら何かするつもりです」

「むむつ、なんだと?」

荷馬車を追う兵士達の隊長である丸男は荷台を睨んだ。

ボズが弓を持って準備をしているところが見えた。

「奴ら、弓を持っているぞ、気をつけろ!」

「ははつ」

兵士全員に指示をして丸男は馬を走らせながら剣を抜く。
「子供の弓矢など、簡単に弾いてくれるわあ!」

ズガシャッ。

丸男が言つた途端に部下の兵士が馬と一緒に転げ落ちた。

「なにい?!

驚く暇も無く残りの兵士達も見事に落ちる。

「そうか、小賢しい!我らではなく馬を狙つてはいるというのか!皆、落ち着くのだ」

丸男が言つた時は、自分の馬が大きく舞い上がった後だった。馬は丸男と一緒に崩れ落ちた。

「ぐああああ...」

悲鳴が遠ざかっていくのを馬車は感じながら減速することなくその場を後にした。

ルシア達が目指していたバリュアス城へ行く前に宿泊する予定だ

つた町、グレスコ町。城へ行くにはこの町を通り過ぎないといけないために、兵士が多い。警備が徹底しているのだ。まだルシア達の情報は知られていらない。

真っ赤な荷馬車がグレスコ町へ入ってきた。周りが騒ぎ出した。赤い色の荷馬車には理由がある。プロウフィッシュ・シユ王専用馬車といつ意味で、絶対に手を出すことは許されない。例えそれが盗賊であらうとも、国の掟としてあつてはならないことなのだ。

普通であれば、荷台の中を確認するのだが、赤馬車はそんなことは簡単に通過させる。

そこまでの態勢を持つてくるということは、如何わしいことをしているに決まっていると疑われるのも無理もないことだが、当のプロウフィッシュ・シユ王はそんな疑惑や批判など何とも思っていないため、どうとなることはない。

赤い荷馬車には予想通り、誘拐されたアリシエとオークランドの愛馬ストラングが乗っているが、中身の確認をしないので馬車は通過してバリュアス城へ一直線に進む。

ルシア達は、追いつけることが出来るのであらうか。

「またか…」

グレスコ町へ入ってきた赤馬車を見て男が呟いた。
頑丈な肉体、四角顔の男。ガルド会議の時にプロウフィッシュ・シユ王の護衛として付いていったムトウだった。

自国の王とはいえ、プロウフィッシュ・シユの横暴さには呆れていた。赤馬車の中には毎回何を積んでいるのか。ムトウの疑問は膨れ上がっていた。

「…どうでもいい、さ。王のことなんて、さ」

隣にいたもう1人の細身な男がムトウをたしなめた。語尾に「さ」を付けるのが癖の変な男である。

「そろは言つが、アルヴァニー。気にはならないのか、王が毎回毎

回何をしていいのか

ムトウが悔しそうに言った。

「気にはなるがどうしようもない、さ。詮索したところでわかるわけがない、む」

アルヴァニーと呼ばれた男はお手上げと言った。

ムトウの疑いも結局は本人だけの考えとして赤馬車はゆっくりと通り過ぎていった。

赤馬車が過ぎてからまもなくして1台の荷馬車が到着した。

ムトウは、手綱を持っていたクラウボの顔に見覚えがないせいで気になっていた。

荷台から、ルシア、オークランド、グリークス、ステュー、ボズの5人が降ってきた。

「他所の国の者か？」

ムトウは誰に言つともなく口に出した。

長年の勘なのか、何かあると感じた。それも王に関わる何かが…。

その勘は夜が明けた時にわかることになる。

ルシア達を追っていた兵士達の報告によつて…。

つづく

ルシア達を追っていた丸男は、ボロボロの状態でグレスコ町へ帰ってきた。まさか子供の弓であっけなく馬を倒され、逃げられたなんて言い訳をしたくなかったが、この有様では何を言われても仕方ない。

「ロール、どうした？ その傷は？」

ムトウが丸男に話しかけてきた。ロールとは丸男の名である。

「あっ、ムトウさん」

ロールは返事をしたが、すぐに下を向いた。

「おいおい、どうしたんだ？」

面倒見の良いムトウは落ち込んでいたり、様子のおかしい者を見るつゝい気にかけてしまう。時にはそれが大きなお世話となることがあるのだが、わかつても止めることはできなかつた。

「じ……実は……」

幸い、ロールはムトウを慕つてゐる1人なので、簡単に話し出した。怪しい荷馬車の情報が入り、止めたところに逃げ出して追いかけている最中に逃げられた……。

ムトウが怪訝な顔をする。ロールの言つてゐる馬車や弓で攻撃した子供の特徴など、先程町に入ってきた馬車と酷似している。そのことを聞く前にロールが「あっ……」と指差した。

「アレです……。あの馬車ですよ、ムトウさん」

ムトウの直感は当たつていた。ロールが指差している先は、まさにあのルシア達が乗つていた馬車だつたのだ。

「間違いないのか

「当たり前ですよ。見間違えるわけありません。一気に押し込みましょう！」

「まあ、待て。ここは任せらる」

ムトウはロールを止め、ルシア達の宿泊している宿屋へ向かつた。

クラウボは疲れきっていた。アリシェを誘拐したために、バリュアス国に来ることになってしまった、自業自得とはいえ、危うく命を落とすところだった。早く用件を済ませて逃げ出したいと望んでいた。1日も早く目的地のバリュアス城へ一行を連れて行くことだ。

「明日も早いぞ、もう寝ろ」

グリークスがクラウボに毛布を放り投げた。

「あ…どうも」

部屋は狭く、そこに全員が入り込んでいるため非常に窮屈だった。ボズとステューの2人の子供は特別に寝台で眠るよう指示されていた。2人はお互いが嫌そだったがあまり文句も言わずに寝付いた。よほど疲れていたのだろう。グリークスとオークランド、そしてルシアは床である。当然クラウボも床だった。

明日も早いということは嘘でもなく本当のことなのだろう、クラウボは疲れを取るために早々に眠りに付いて現実逃避するために楽しい夢でも見ようと目を閉じた。

うとうとし始めた時に、部屋の扉を軽く叩く音が響いた。

クラウボは勿論のこと、グリークス、オークランド、ルシアは飛び起きた。子供達は起きることなく寝ている。

「誰だ？」

グリークスが言った。

「遅くにすまない。バリュアス国の大勇者、ムトウと言う。怪しい者ではないが、聞きたいことがあってここにきた。良ければ部屋に入れてももらえないか」

悪意の感じられない声が扉の向こうから聞こえてきた。

「わかった」

グリークスは返事をすると扉を開けるようクラウボに指示をした。この夜遅くの訪問はある程度の確信があつての訪問なのだろう。無理に断るよりか話し合えるのであれば話し合いで解決したい。目

的はアリシェを取り戻すことだとグリークスは判断した。

扉を開けると、ムトウが大きな身体を見せながら入ってきた。

「すまない」

ムトウは礼をした。夜が更けていることもあってムトウの声は心なしか小さい。

「单刀直入に言つが、部下が君達の馬車を追つていたと聞いた。それに関して君達は何か言つことはあるのだろうか」

「ある」

グリークスは一言断言した。

「俺達はルキボル国からアーガス国へ旅をしていた。その時、アリシェという女の子が誘拐されて、追跡した結果、あんた達のこの国へ連れて行かれたと聞いた。そこにいるクラウボを案内役にしてここまで来んだ。狙われようとも俺達は退かない。アリシェを救うためにはな。バリュアス城まで必ず行く」

グリークスの説明を聞き、ムトウは絶句した。なぜなら、バリュアス国専用の赤馬車がまさにそのアリシェ誘拐に関わっていることを物語つていていたからだった。

「…そうか…わかった…」

ムトウはしばらく考えていたが、意を決したように口を開いた。
「城へまではなんとかしよう。部下にも手を出させないように伝えておく」

オーランドの表情が明るくなつた。

「あ…ありがとうございます」

「確かに最近國のしていることが怪しいと感じていた。今日も赤い馬車が通り過ぎたのだが、君達の話から予想すると、その馬車の中にアリシェという子がいたのかもしれない」

国への疑問を持っていたムトウは何かしてあげたい衝動に駆られた。本来であれば許されることではない。反逆行為と思われても仕方ないのだが、あくまでも城へ到着する手助けだけであれば、大罪にはならないはずだとムトウは考えていた。

「へえ、それで、さ。ムトウ一人でいったの、や」

アルヴァニーはロールの報告を聞いていた。ムトウと同じ勇者のアルヴァニーはムトウのように甘くはない。

「そうなんです。アルヴァニーさん。でも、ここは捕まえるしかな
いと思うんです」

ムトウを慕っていたロールだが、さすがに今回は納得いかないようだった。逃げられた相手が目の前にいるのだ。何も出来ない
といふことが悔しくてたまらない。

「そ、さ。じゃあ、さ。突入するしかないだらう、や」

アルヴァニーの指示で兵士が集り始め、宿屋の前に陣取った。

「ムトウが出てきた同時に、さ。突入、や」

アルヴァニーが言った。

バリュアス国の兵士は、ムトウが出てくるまで静かに時を待つた。
……。

つづく

ムトウとアルヴァニーは幼馴染だった。

正義感溢れたムトウと違つて、アルヴァニーは長いものに巻かれ性格だった。対照的な2人だったが、少年時代に好きな女の子を取り合いになつて喧嘩になつた。結果引き分けに終わったのだが、この日を境に2人の友情は深まつていつた。

どこへ行くにも2人は一緒だった。大勢を相手に喧嘩した時も一緒だった。お互いがお互いの行動を予測出来るために、2人の息はぴつたりだった。例えどんなに大勢に囲まれようがムトウとアルヴァニーは負け知らずで少年時代を過ごしたのだ。

月日が経ち、国の兵士を目指す志は変わらなかつた。

だが、兵士になつてからの目標は少しずつズれていくことになる。階級など気にしないムトウは相変わらずの正義感で納得がいかないことであれば誰だろうと意見を述べた。その意見が的確であればあるほど、ムトウは上の人間からは煙たがられた。

反対にアルヴァニーは、野心があつた。偉くなりたい。出世したい。そんな気持ちが芽生えていたのだ。上を望むことは悪いことではない。しかし、時として冷酷な選択をしないといけない時もある。それがたとえ家族であろうとも…。

ムトウが宿屋に入つてかなりの時間が経つ。怪しい団体と話をするためといふことだつたが、アルヴァニーはそんな甘くはなかつた。話などする前に突入して捕まえるべきであると判断した。

まずはムトウが話し終えて宿屋から出でてくるのを待つた。ムトウは怒るだろう。けれど、精一杯の気遣いだ。話し中に突入すれば、ムトウの顔も潰れる。あくまでもムトウとは別の動きとして…とアルヴァニーは考えていた。

「結局は…さ。怒るだろ？」「

アルヴァニーは呟いた。

「……アルヴァニーさん……」

兵士に1人が不安な顔で振り向いた。周囲も不穏な空気が包み込む。

ムトウが宿屋から出てこない。あまりにも遅い。

それはアルヴァニーも感じていた。

「……」

はつ、とアルヴァニーの脳裏にあの少年時代の頃が蘇った。どこへ行くにも一緒にいた。『お互いがお互いの行動を予測出来る』2人の息はぴったりだつた。

「しまつた……」

アルヴァニーは悔しそうに唇を噛んだ。

「突入だ！行けっ！」

アルヴァニーの命令が響いた。口癖など初めからなかつたのか、怒りで忘れたのか出てこなかつた。

「しつしかし、ムトウさんが……」

「構わんつ、行け！」

兵士が宿屋に向かつて走り出した。

すぐに兵士が慌てて報告した。

「いませんつ！宿屋に奴らの姿も、ムトウさんも、裏口から逃げたようです！」

お互いがお互いの予測が出来る。

ムトウはアルヴァニーが兵士を突入してくることを予測したのだ。だからこそ、裏口からの脱出をルシア達に教えたのだ。アルヴァニーはそれに気が付かなかつた。

「くそつ、ムトウめ。……お前の動きを読めるのはこいつらも同じだぞ」

アルヴァニーはそう言つと考えを巡らせる。

ムトウが奴らの逃亡に加担する理由はなんだ？全く知らない奴ら

をいきなり信用する理由はなんだ？ムトウの思いと奴らの思いが一致したから？ムトウの思い？最近の思い？国の不満、疑惑……。

アルヴァニーは馬に飛び乗り、兵士達に命令した。

「城だ、ムトウはバリュアス城へ向かう気だ。城への道筋を全て止める、そして伝令を出せ！……さ」

思い出したように口癖が復活した。

一方、ムトウの指示で宿屋から脱出したルシア達は、全力で走っていた。頼りの馬車はない。取りに行く暇などなかつた。

さすがにボズとステューは寝起きのためにまともに走ることは出来ない。ムトウが2人を抱えて走っている。彼の鍛え抜かれた力は子供2人を抱えることなど容易いことだ。

「……また逃げてるの？」

ぼくとした寝起き顔でボズが言った。

「黙つていろ、舌を噛むぞ」

ムトウが言った。

ボズが「誰？」と言いたげな表情になつたが、まだ考えるまで脳が起きていらない。ボズはムトウに従い口をつむつた。

「なつなんで、俺が、こんなつ、ことに」

クラウボが、ひいひいと荒い息を吐いている。

「助かりましたムトウさん。でも大丈夫ですか？」

苦しそうにルシアが聞いた。まだ走るには体力が厳しそうである。

「なあに、大丈夫だ、気にするな」

ムトウは笑顔を見せた。

「ここまで来れば問題ないのでは……？」

同じく苦しそうに走っているオークランドが言った。

「駄目だ。アルヴァニーという奴は、恐ろしく頭の回る奴でな、きっと、宿屋を抜け出したのも、バリュアス城へ向かっていることもお見通しだろう。このまま正直に行ついたら待ち伏せにあつて捕

まる。かと言つて追つ手もいるから止まることもできん、挟みうちにしてよつと思つてゐるからな」

ムトウの心配はここだつた。お互ひの行動が読める2人だからこそ次なる動きがわかる。アルヴァニーは間違いなくあらゆる道を押さえにくるはずだ。そうなると城へ入るのは難しい。アルヴァニーの裏をかくには自分の予測と別の考えが出来る人間が必要だつた。「つまりムトウ。その言い方だとあんたもそのアルヴァニーつて奴の動きがある程度は読めるし、向こうもあんたの動きが読めるんだな」

話しかけてきたのはグリークスだつた。

「ん? あ…ああ、まあ…な」

一瞬の期待がムトウの目の前を通過した。

「よし。聞くが、あんたがこのまま城を田描すのであれば、どう行く?」

グリークスの質問にムトウは考えた。

「う…む。回りくどいことはしたくない。堂々と正面から行くかな」

ムトウの答えにグリークスは頷いた。

「わかつた、ならば正面から行こう」

横で聞いていたクラウボが叫んだ。

「おつ、おい、馬鹿なこと、言つくな、よ。さつき読まれるとかなんとか言つてたじやねえか」

「…なるほど…そういうことですか」

ルシアが感心しながら続ける。

「僕達が宿屋から逃げられたのは、ムトウさんがアルヴァニーさんの動きを読んだからこそです。そうなると今度はアルヴァニーさんもムトウさんの動きを読むはずです。普通で考えれば、正面から来る…と」

「だからヤベーだろ」

クラウボがどうだと言わんばかりに食つて掛かる。

「普通で考えれば、です。ですが、アルヴァニーさんはそれをムト

ウさんが既に予測していて、正面ではなく脇道から来ると読んでいるはず。なぜなら一度ムトウさんに読まれているから」

「その通りだルシア。一度予測されたから、次も予測されていると考える。そうなるとその裏をかきたくなるものだ。正面はきっと一番手薄な場所になつていてるだろ?」

グリークスが自信たっぷりに言った。

「そうか、そういうことか」

少し遅れてオーフラングが言った。クラウボはまだよくわかつていないう�だつた。

「城に入れば隠れるところくらいあるのだろう?」

「うむ、それは任せる。では正面から行くのだな、一氣に行くぞ」ムトウは力強く言った。同時にこの若すぎる一行を頼もしく感じた。

つづく

ムトウが裏切り者になつたという噂はあつといつ間に城、町に広まつた。

それはグレスコ町からルシア達と一緒に飛び出してからまだ1日しか経っていない。

兵士から、側近、大臣、王にまで届いた噂だが、王は馬鹿馬鹿しいと一蹴した。

ムトウに對しての信頼ではない。そんな話すら興味ない。ブロウフィッシュ王は自分のことしか興味がないのである。

ブロウフィッシュ王が持つていてもつ一つの興味。これから楽しみな事。辿り着く少女を使つた余興、それが王の望み。

しかし少數だが、ムトウの行為を裏切りではなく、突發的な出来事だと悟つてゐる者がいる。

その中にはブロウフィッシュ王の右腕である若き女ルリードもいた。彼女はムトウのことをよくわかつてゐた。王への不満は抱いてゐるが、國への忠誠心は揺りぐれがないということを知つていたからだ。

ルリードの直感は当たる。何かに巻き込まれてゐるのだと思つた。それも王が、國が関わつてゐる大きな事に。

「おう、きたか、きたか」

ブロウフィッシュ王は満面の笑みで騒ぎ始めた。

待ちわびた赤い馬車が到着したのだ。今、最も樂しみにしている余興。その主役なる人間、ブロウフィッシュにとつてみれば「物」だろうが、とにかく到着した。

「いいか、大事に扱えよ」

王は兵士に命令し、誰かを探すようにキヨロキヨロし始めた。

「おい、ルリード、ルリードはどうだ？！」

プロウフィッシュの叫び声に、端からルリードが現れた。

「呼びましたか？王」

物静かにルリードは言った。美しく鋭い視線がプロウフィッシュを見据える。

「おお、そこにはいたか、ルリード。喜べ、今日も、例の余興じゃ」ルリードの反応を観察したかったのか、覗き込むようにプロウフィッシュは言った。

「そうですか」

氷のルリードと呼ばれる彼女は表情を出さずに返事をした。

「…なんだ、それだけか？」お仲間』がきたんじやぞ「プロウフィッシュは意味深な言葉を投げかける。

ほんの一瞬、誰にも気付かないほんの一瞬だけだが、ルリードの目が泳いだ。

「仲間など…いません」

そう言つとルリードは踵を返して王の前から消えた。

「ぶわあっはっはっはっ！」

満足気に笑うプロウフィッシュの笑い声が城内に木霊した。

「おい、ムトウの奴、裏切り者になつたみたいだな」

城下町には兵士専用の訓練場がある。ここで兵士を鍛えたり、作戦を整えたりするのだが、今の話題は当然ムトウのことだった。

「噂だと、城に向かつてくるつてよ」「じゃあ、ここにもくるつてことじやないか」「なんだよ、面倒だな、アルヴァニーの軍に捕まればいいのにな」

よくある愚痴が飛び交う中で、どうしても我慢できない者もいる。

「違う！ムトウさんが裏切り者になるはずはない！」

まだ少年に間違えられそうな童顔の男は、ムトウへの悪い噂を一掃するつもりで叫んだ。

「だつたらよマハラ、説明できんのかよ」

兵士の1人が、マハラと呼ばれた童顔の男に質問した。

聞いたマハラは怒り顔で言い返す。

「まず、裏切られたとなぜ思うんだ。もしかしたら脅されてるかもしれないじゃないか」

「はつ、脅される？あの戦士ムトウだぜ？あの屈強なムトウが脅されるような状態になるわきやねーだろ」

兵士も負けじと意見を述べる。

「…む…確かにそうだが、曲がったことの嫌いなムトウさんがそういうことをするってことは、きっと何か理由があるんだよ、正しい理由が」

「逃げ出しだ、敵扱いになるくらいの正しい理由ってなんだよ」

「そんなこと知る訳ない、とにかく今言えることばムトウさんを信じるんだ」

ムトウのことが大好きなマハラは、どんなことがあってもムトウを悪者にはしたくなかったし、本当に悪者になつていてるわけないと心の底から思つていた。

「信じられないね、そんなこと」

兵士は呆れて手を挙げた。

こんなやり取りが延々と続いてからしばらくして一報が届いた。

渦中のムトウ率いる一行が、堂々と正面に現れ、城下町へ投入してきたのだった。そしてまんまと進入を許してしまつたのである。

正面ではなく周りを集中警備していたアルヴァニーの裏をかいだのだ。

町の中は厳戒態勢の指令が出た。慌てて兵士達が飛び出していく。紛れて飛び出したマハラはムトウに会いたいことだけを考えた。眞実が分かるし、手を貸すこともできる。

マハラは喜び勇んで町中へ出た。

突入したルシア達はムトウの案内ですぐに安全な家に逃げ込んだ。

「ここが安全だという根拠はないぞ」

グリークスが真っ先に意見した。

「なぜだ？ ここは俺の家だぞ」

ムトウは自信持つて言った。

「ここがお前の家なら一番最初に調べられるだろ？ が

グリークスは呆れて言う。

「いやいや、ここはもう何十年も使つていない家だ、俺のいつもの家は城の中か、さっきの町にあるからな。この家は誰も覚えていない、心配するな」

「だといいが」

「早く、アリシエのところにいってみよ」

急かすようにボズが言った。

「焦んな坊主。もう少し様子を見よう、町に入つたことで警戒が強まっているからな。ここは待機だ」

ムトウは背伸びをして床に転がつた。身体の疲れを休ませるためだ。

城の中に入るため、一時の休息を全員はとつた。

第10回 いばれ話

皆さん、いつもありがとうございます。

読んでくれている方も、読んでない方も、ありがとうございます。

第4部まできました。

今回は早めに終わらせて、年内中には第4部を終了。
年明けに第5部の開始を予定しています。

そうなると1週間毎の（しかも最近遅れている）掲載更新だと間に合わないのです。

時期を見て、祭りの如く連続掲載をしようと思っています。

事後との都合上なかなか書く時間がなくて、焦っています。
遅れることが申し訳なく感じています。

サブタイトルの「想いは必ずその心に」ですが、題名の意味も徐々にわかつてきますので、楽しみにいて下さいね。

全然活躍していない物語の主人公ルシアが気がかりですけど・・・。

これから始まる第3章は、ルシアの話は休憩して、久しぶりのハッショ達の近況報告の話です。

簡単に終わらせて、第4章へと続きます。

スピード展開を予定していますので、これからもよろしくお願ひしま

す。

第6章くらいで、終わらせるより考えていてますけど、第3部の時も同じよつて考えていて大幅に延びたことがあるので、正直わかりません。

もしかしたら、年内には……いやいや、なんとか頑張ります。

負けずに続けますから見捨てずについてきて頂ければありがたいです。

一生懸命書いてきますので、よろしくです。

それでは皆さん、第3章お楽しみにいへ。
今年もあと少し、全力で突っ走ります！

ルシア達一行が危険を犯しながらもバリュアス城へなんとか入り込み、しばらく身を隠している頃、ある別の者達はそれぞれの思いを胸に動いていた。

ある者は報告へ、ある者は故郷へと、ある者は野望を抱いて、ある者は不安を抱えて、使命や命令を実行するべく行動していた。止まるこことを許されない運命は世界を巻き込んでいく。

バリュアス国にいるルシア達に如何なる影響を及ぼすのは、まだ遠い未来のことかもしれないし、近い未来のことかもしれない……。

赤髪の女カインドと金髪の男シールの2人は聖国ドルコルドの人間で暗殺部隊である。

カインド達は、先のバロゲニア神殿でのガルド会議で大神官のデスペラドの命を奪った。世間的にはデスペラド4男息子であるグリークスが犯人となっているが、真の実行犯はカインドとシールの2人で、それを指図したのはドルコルド国のマルーン教皇と、ヴィジョンズという大神官の3男だった。

計画では大神官殺しをグリークスに罪を着せて、然るべき刑を執行するはずだったのだが、グリークスが逃げ出したために、カインドとシールはグリークスを暗殺することになった。

ルキボル国での政権争いの時に、グリークスを追い詰めるまでに至つたのだが、失敗し、結果グリークスは仲間と共に旅を続けてくる。兄のヴィジョンズ、そしてマルーン教皇に復讐することを最終目的として。

カインド達は一時期現場を離れた。マルーン教皇への現状の報告するためである。報告が済めばすぐに任務へ戻る。グリークスの命を奪いに。

「…ねえ、カインド。なんでここなの？ドルゴルド国に床ひつよ
～マルーン教皇に話さないといけないんじゃないの～」

シールは面倒臭そうに愚痴を言った。

「うつさい、シール。ここでいいんだ。余計なこと言つな

カインドも苛々と返事した。

カインド達は、バロゲニア神殿の近くにある村で待機している。
「あたし達が堂々とマルーン教皇に会えるわけないだろ？ ちゃん
と考えるシール」

いくらドルゴルド國の人間とはいえ、マルーン教皇に報告をする
と不味いことになるのは明白だった。どこで誰が何を見たり聞いて
いるのかわからない。こついう場合は別の者に報告を託することに
なる。

その待ち合わせ場所がこの村だったのだが、いつまで経つても誰
も現れないでカインドは苛ついていた。早く報告を済ませてグリ
ークス暗殺を実行したいのだ。

「あつ…誰か来るよ～」

シールが目ざとく何者かと見つけ、指差した。

「ふん、ようやく来たか」

カインドは溜息をついた。

遠くから非常に落ち着いた動きで歩いてくる者がいる。

老婆だった。

この老婆こそ、ドルゴルド國の連絡係である。

「遅いぞ、パラス、モタモタするな」

「あら、あら、キツイ言だねえ、カインド。こつちは年寄りだつ
てこつのにさ」

パラスと呼ばれた老婆は汚い服を着たまま薄気味悪く笑つた。

「久しぶり～、パラスちゃん～」

シールが相変わらずの軽い口調で言つた。

「あら、あら、シールじゃないかえ。久しぶりだね。元氣で暗殺してるかい？」

「うん、ぱっちりさ……あ、でも最近はね……」

言いかけたシールの頭をカインドが殴つた。

「痛……！ 酷い！ 酷いよカインド～！」

シールは頭を抱えながら地面をゴロゴロをのたうちまわった。本当は大して痛くないのだが、パラスの同情を引こうとしてわざと痛がるフリをしていた。

「うつさい！ あんたは黙つてな」

「あら、あら、恐いことだねえ、カインド」

パラスは熱いお茶を一杯飲んで、ふうと一息ついた。

「じゃ、聞こうかね、カインド」

「ああ。あたし達はグリーケスを追つて、ルキボル国へ向かつた……」

延々とカインドの説明は続く。余計なことを言つてしまつシールはその間ずつと黙つていた。何か言いたかったが、言えなかつた。カインドの目が光つっていたからだ。それと特に重要なことでもなかつた。

「……というわけで、あたし達はグリーケスを追つ……」

ようやく長い話が終わつた。パラスは静かに聞いていた。

「カインド、ちょいと聞くが……」

パラスはその場を離れようとしたカインドを引き止めた。カインドは振り返る。

「なんだ？」

「そのルシアつて坊やだけどねえ。お前さんの話だと、性格が突然変化したように聞こえるんだがねえ」

「その通りだ。2重人格といつてもおかしくない。それに、妙な技で人を簡単に消し殺した」

「なるほどねえ……」

カインドの答えにパラスは考え込んだ。

「なんだ？なにか思うことがあるのか？」

カインドは問う。パラスの返事は少し曖昧だった。

「いや……ちょっと……色々とねえ……」

詰め寄つて聞くつもりはカインドにはなかった。ルシアの力は脅威だが、興味がない。カインドの興味はグリーケスただ一人であった。彼女にとつて任務が自分の生きがいであり、存在価値を見出せる唯一の方法なのであり、今命令されていることを行うことしか興味がない。

「マルーン教皇への報告は任せたぞ、パラス。あたし達は行く」カインドは方向転換して走り出した。

「あら、あら、せっかちだねえ、もう少しゆっくりしてもいいじゃないかい？」

パラスがお茶を飲みながら笑顔で言った。

「そうだよ、カインド、パラスの言う通りだよ。もう少しさ、ここに……さあ……わかつたよ~行くよ~、そんなに睨まないでよ~」シールは慌ててカインドの後を追つた。

見送りながら、パラスは呟いた。

「ルシア坊や……かい。きっとマルーン教皇の探している人間だねえ

…

つづく

アーガス国を目指すために旅をしていた3人。大剣使いで白髪の青年ハッシュ、元グルニア国將軍ファミリストン、元部下オキュラス。

山賊を撃退しながら、ようやくアーガス国領地へ入ることができた。

森の中を抜ければ、ハッシュの師であるクラシェイカの待つ町へ辿り着く。

「剣の国アーガスか…。ハッシュの師匠って凄い人なんだろ?」
オキュラスが話しだした。口数の少ないハッシュとファミリストンを補うためなのか、元々話し好きなオキュラスはよく喋るのだが、結局独り言のようになってしまった。

「…まあ、凄い人だよ」

ハッシュは呟いた。

オキュラスとしてはどう凄いのかを教えて欲しいのだが、そこまで突つ込めない雰囲気がハッシュにはある。

しばらく歩いていると3人ともが全員異様な空気を感じた。

鈍感なオキュラスでさえもドス黒く重い威圧感で息が詰まりそうになつた。

黒い剣を腰にかけ、鎧もなにも纏つていなく、汚い服を着た男が立つていた。鋭い赤い目がハッシュ達を捕らえて離さない。

「…ハッシュ…」

ファミリストンが剣に手をかける。

「いや…これは俺の相手だ」

ハッシュはファミリストンを制した。直感でそう思つ。この男は、ハッシュに戦いを挑む気である。

「…自分は絶望神に仕える四天王の一人、クラシクポードと申す

男はいきなり名乗つた。

「絶望神？？四天王？？」

オキュラスが唸つた。

ハッシュュが一步前へ出る。

「それで、クラシクボード。俺達に何の用だ」

言い終わるや否やクラシクボードは軽々と羽のようすに宙を舞つた。

既に黒剣を抜き襲い掛かる。

「離れろっ」

ハッシュュはファミリストン、オキュラスに向けて叫んだ。
ガキンッ。剣と剣が交わる音。

一瞬早く抜き出したハッシュュの大剣でクラシクボードの黒剣を防いだ。

「ほう…さすがだな…ハッシュュ…殿」

「それはどうも」

ハッシュュは蹴りを繰り出したが、クラシクボードは綿毛の如く軽々とかわす。

「軽い…なんだ、あいつは。体重がないのか？」

見ていたファミリストンが驚きの声を出す。

「自分はハッシュュ殿の力をみておこうと思い、この場へやつてきた」
クラシクボードはふわりと距離を置いて着陸した。

「…俺の力？そんなモノ必要か？」

ハッシュュのわざとらしい質問に、クラシクボードは一笑した。

「それは、ハッシュュ殿もよくわかつているのでは？絶望神が危惧するには太陽神。太陽神の仲間は7人の英雄達であろう。その英雄の1人であるハッシュュ殿の力をみるのは当然。まして自分と同じ剣の使い手であれば尚更のこと」

「け…結構真面目な奴ですね…。絶望神の仲間のくせに…」

オキュラスが言った。

ファミリストンも同じことを感じていた。絶望の神は卑怯でずる賢くて絶対的な悪だと教えられてきた。目の前にいるこの絶望神四

天王の1人クラシクボードは堂々と現れて戦いを挑んでいるのだ。

「はつ、俺の力がわかるのか？それで…」

ハッシュが構える。

「ええ、わかる。充分過ぎるほどに」

クラシクボードも構えに入る。

ハッシュがすっと息を吸つた。それが合図となつた。

背中に寒気を感じた時には、クラシクボードはハッシュの目の前に迫つていた。

「！」

「えつ！」

オキュラスが叫んだ。

「速い…！」

ハッシュは体勢を整える。

「ハッシュ殿、貴方は身体よりも大きい剣を扱うことにより破壊力は相当なものだが、接近戦に対応できるだけの速さない」

ハッシュの体勢がクラシクボードへ向けられる前に黒剣がハッシュの喉元へ突きつけられた。

「うつ…」

「今までの相手は接近戦になる前にその圧倒的な剣で倒してきたと思うが、ここまで速く動くとは予想外だつたかな」

クラシクボードは剣を收めた。

「貴方の力はよくわかりました、ハッシュ殿。はつきり言つて絶望神の相手にはなりません。世界は我々の勝利となることは間違いない」

「んつ…とクラシクボードは宙に飛び、姿が消えたと同時に気配も消えた。あつという間にいなくなつた。

「ハ…ハッシュ…」

心配そうにオキュラスが話しかけてきた。ハッシュが敗れるところなど初めて見た。かなりのショックを受けていることだろうとオキュラスは思った。

「……ん? どうした?」「

ハッシュの返ってきた言葉は平然とした返事だった。

「え? あ……いや……落ち込んでいるのかな……って……」

「そんなわけないだろ、本気だしてないのに」

オキュラスは啞然とした。

「は? え? そ、 そうなの?」

「あそこまで堂々とみておいでって言つてたし、俺達を殺す気がないのはわかつてた」

ファミリストンが口を開いた。

「ま、 きっと敵さんもお見通しのはずだ」

ハッシュも当たり前のように言つた。

「さて……じゃあ……先を進むか」

「それにしても、 大変な奴が出てきたもんだ」

ハッシュとファミリストンは町目指して歩き出した。その姿をボカンとオキュラスは見ていたが、 すぐに我に返つて追いかけていった。

少し離れた場所で、 クラシクボードは考え方をしていた。

「……ハッシュか? 。 くつ、 ふふふ」

クラシクボードは笑い出した。自分も手を抜いていたが、 ハッシュもまた手を抜いていたからだ。相手の本気を探ろうとしたのだが、 反対に相手も手を抜いてこけらの力を探ろうとしたことを思い出して笑いが出たのだった。

「それでも……まだまだ……だな。 しかし……面白く……なりそうだ」

クラシクボードは愉快に笑つた。

バリュアス国。

城の中や町の中は混乱していた。

怪しい団体を見かけ、捕らえる状況に陥った時に、バリュアス国の戦士ムトウがその逃亡の手助けをしたのだ。

怪しい団体とは、誘拐された少女アリシェを追つてバリュアス国へきた、ルシアやグリークス達である。

戦士ムトウはアリシェの誘拐にバリュアス国の王プロウフィッシュが関わっているということを察知したため、彼らに手を貸すことになったのだ。

だが、それが問題となつていて、國を裏切つた反逆者としてムトウは罪人になるかもしだなかつた。

その報告はプロウフィッシュ王に届くことはなく、側近となる女、ルリードで留めておくことになつていて。

「ルリードさん、いかが致しましょう」

兵士の1人が不安そうに言つた。まさか忠誠心厚いムトウが裏切るとは思えなかつたからだ。

「…王への報告は私からする。お前は下がれ」

ルリードは静かに言つた。黒い短髪の姿は男にも見えるのだが、細く弱々しい身体はやはり女らしい。

兵士を下がらせてもルリードは考へ込んでいた。ムトウとの付き合いは上司部下の関係ではあるが短くはない。ムトウのことを良く知つているつもりのルリードからすれば、ムトウが裏切るといつことに納得が出来ない。

「…」

確かに最近の王の横暴さに不満を抱いていたことは知つていて、…ということは行為の裏にはプロウフィッシュ王への疑念も絡んでゐるのか。

ルリードの脳裏にすぐ思い浮かんだのは、毎回定期的に城へ送られる赤い馬車だった。ルリードの頭に痛みが走る。彼女はこの赤馬車の意味を知っている。馬車に何が入っているのかも。

手を軽く頭に置いて押さえると古い記憶が蘇つてくる。

ルリードは頭を何度も振り、何事もないように歩き始めた。

戦士ムトウの幼馴染であり同じ立場であるアルヴァーニーはムトウ搜索に躍起になっていた。

村でムトウを取り逃がし、更に町の中へ裏をかかれて入られ、姿を消されたのだ。焦らない方がおかしい。

「まだ見つからないのか？ムトウは、さ」

苛立たしくアルヴァーニーは言った。町の人間に迷惑をかけるわけにはいかないため、内密で搜索をしているせいもあってか、はかどつていながら現状だ。

「城には報告がきてないから、さ。まだ町の中にいるはずなんだ。慎重に探すんだ、さ」

アルヴァーニーは兵士達に指示をした。

「ムトウ…、どこにいるのだ」

アルヴァーニーは呟いた。

「よし、囮になろう
ムトウが進言した。

現在隠れている町の空き家。忘れ去られた家とはいっても、これだけの搜索が行われている以上見つかるもの時間の問題だ。次なる行動を余儀なくされる。

「お…囮つて、ムトウさんが？」
ボズが聞いた。

「他に誰がいる、考えたらよくわかるだろ？」

ステューラーの言葉に、ボズもわかつてゐると言いたげに睨む。

「そうだな、君らが素早く城の中に入るには、ここで誰かが足止めする者が必要だ。そうなるとここで現れて一番大騒ぎになるのが…」

「ムトウさんといつことか」

オークランドが言つた。

「確かにそれしか手はない。連中は俺達の特徴をまだ把握していないから城へ侵入するには混乱に乗じて動くしかない」

グリークスが続けて同意した。

「さすがに真正面は厳しいでしょ、う？」

ルシアが聞いた。ムトウは頷く。

「うむ。ここは抜け道を通るしかない。そこは事前に教えておいつよし、もう少しで実行するぞ、準備をしておけ」

話し合いが終わりかけた頃に、情けない声が発せられた。

「あの…おい…俺は…もういいだろ？」

声の主はクラウボだった。港でルシア達に喧嘩を売つてから返り討ちにあい巻き込まれてここまで連れてこられた。話がこんなにも深刻になるとさすがに部外者として関わりあいたくないのが普通の思考だ。

「…」

誰もがクラウボのことなど忘れていたような表情で見つめた。

「おいつ！ もういいだろ？ 俺はここで別れさせてもらつぜ。訳のわからないことに巻き込まれるんは勘弁してくれ」

クラウボは本音をぶつけた。しかし、彼はすっかり忘れていた。事の原因を作ったのは彼であることを。アリシエを誘拐などしなければこんな事にならなかつたのだ。

「…自分のしたことを忘れたわけじゃないよな」

厳しい顔でステューラーが言つた。

「う…。で、でも、十分だろ？ 償つたと済(す)ば、これ以上俺の出来ることなんてねえよ」

子供に言い負かされてたまるかとクラウボは言い返した。

「ま、もうこいんじゃないのか。わあ、始めるや」
ムトウは軽く言つて立ち上がつた。

「お、おこ」

他の皆も立ち上がつた。

「そうだな…好きにしや」

グリークスはそう言つて離れた。

「…あ、ああ」

クラウボはあつからかんとんの場に佇んだ。

「いいか…いくぞ」

ムトウは言つた。全員が頷く。

扉を勢いよく開けてムトウが飛び出した。

つづく

突然のムトウの出現にアルヴァニー率いる捜索部隊は慌てた。たつた1人で現れたのだ。ムトウが逃がした怪しい団体、ルシ亞達はその場にはいない。

「お前1人か、さ。ムトウ」

アルヴァニーが冷静装いながら言つた。

「見ればわかるだろう」

ムトウは返す。

「なぜだ？ ムトウ。王への、国への反逆だぞ、さ」

「国への忠誠は無くしてはいない」

「同じことだ、さ。怪しい侵入者を匿つて、まさか、城へ入れたんじゃないだろうな、さ」

アルヴァニーはムトウを睨む。そこには幼馴染の思いはない。1人の責任者として、犯罪者を裁くつもりである。

「お前は、おかしいと思わないのか？ ブロウフィッシュ王の行動にもしかしたら、彼らの探している少女が巻き込まれているのかもしれないのだぞ」

ムトウはその場にいる全員に聞こえるように言つた。

ブロウフィッシュ王の行動は確かに疑問がある。赤い馬車の中に何が入つているのか分からぬが、隠れながら何かをしている。それも今に始まつたことではない。彼が王の座についてからその傾向はあつた。ムトウはそれを確かめたかった。もう見て見ぬフリはしきくなつた。

「例え、さ。例えそうとしても。王を疑うなどもつてのほかだ。ムトウ、お前を逮捕する。他の者は、さ。残りの奴らを速やかに探せ、さ」

アルヴァニーは部下に指示をしながら、指の関節を鳴らした。鎧を脱ぎ、上半身裸になつた。野次馬の民と傍にいた部下達がざわつせ、さ

いた。

「ふははっ、良くわかつてゐるじゃないか、アルヴァニーー」

ムトウも笑いながら服を脱ぎ、アルヴァニーーと同じ状態になつた。「当たり前だ、さ。お前が簡単に捕まるような奴じゃないことはよくわかつてゐる、さ」

アルヴァニーーが構える。

「そうだな。力ずくで止めてみろ……って感じだな」

ムトウは拳を顔元に出して嬉しそうに笑みを浮かべる。

「今までどれくらい闘つたか覚えているか、さ」

「馬鹿言え、ガキの頃からだぞ、覚えているわけがない。だが、あまり負けた記憶がないがな」

2人の闘いというのは拳で殴りあうことである。それもただの喧嘩ではない。お互が順番に殴り最後まで立つっていた方の勝ちという2人の決め事。殺し合いではない。ムトウとアルヴァニーーの喧嘩は拳同士で語り合つのだ。

どんなに心に鬼にしても、昔の習性は直らない。こんな悠長なことしている場合ではないはずだ。それでもアルヴァニーーには別の選択はなかつた。

「一撃でケリを着けたいんで、さ。最初にいかせてもらうぞ、や」アルヴァニーーが前に進み出た。

「ああ、どうぞ」

ムトウはグツと身体に力を入れる。

大きく振りかぶつてアルヴァニーーはムトウの鳩尾に重い拳を放つた。

野次馬達には、ズトン…といつ音が聞こえたように錯覚する。

「ぐふっ…」

ムトウは息が詰まり崩れ落ちになるが、なんとか堪える。

最初の一撃で勝負を決めるつもりだったアルヴァニーーからすると驚きを隠せない。過去の中でも最高と自画自賛するほどの拳だったからだ。

「よく堪えたな、ヤ。お前の番だ、ヤ」

アルヴァニーは両手を広げて構える。

ムトウは右手を触りながらアルヴァニーの前に立つ。

「お前は…やはり優しいな」

ムトウのいきなりの言葉にアルヴァニーは眉をひそめる。

「何?」

「こいつちはどうしても、王の秘密が知りたい。卑怯者と呼ばれても。すまんな、アルヴァニー」

そう言つと同時にムトウは、アルヴァニーの顔面を渾身の拳で殴りつけた。

「がつ…」

田の前が弾ける様に光ったかと思つと真つ暗になつた。脳が揺れる。吐き気すら覚えてアルヴァニーの意識は飛んで、身体は崩れ落ちた。

2人の殴り合いは顔への攻撃はなしといつのが暗黙の了解であつた。いつもやり方でアルヴァニーの最初の攻撃はムトウの腹だつた。

しかし、ムトウの方がアルヴァニーよりも切羽詰つていた。どうしてもブロウフィッシュ魔王の疑惑を知りたい。その気持ちが、暗黙の了解をも超えたのであつた。

野次馬は勿論のこと、兵士達も動けない。アルヴァニー以外の者にムトウを止められる者がいないからだ。

「早く手当をしてやれ」

言い残してムトウは再び走り出した。アルヴァニーへの心配もあつたが、それよりもルシア達がちゃんと城へ入ることが出来たのかどうかが、気がかりであった。

ムトウは城を見上げた。異様な不安を感じ、嫌な予感がしてならなかつた。

バリュアス城。城内。

ルシア達は、ムトウに教えられた通りの抜け道から城へ侵入することに成功した。

「お…おい、本当に大丈夫なのかよ」

なぜかこの場にいるクラウボが怯えた声で言つた。

散々文句を言つていたクラウボ、だつたのだが、グリークス達のあつさりした態度に怒りを覚えていた。巻き込むだけ巻き込んで簡単に用なしといふことに納得がいかなかつた。本当は心の中では駄々をこねても無理矢理連れて行かれるこつを期待していたのかもしない。

「大丈夫なわけないだろ、不法侵入だ」

グリークスが当然といふ表情で言つた。

「グリークスさん」

ルシアが何かを見つけた。

「僕達の行動は読まれていたわけですね」

闇の先を指差す。

その先には、1人の女性が立つていて。

「あ…」

グリークスの驚きと焦つた声。

その女性とは…ブロウフィッシュユ王の側近…。

ルリードだつた。

づく

「……ル…ルリード…さん」

グリークスは上手く声が出なかつた。しかもいつものグリークスではない。自信のある偉そうな態度はぢやない。まるで子供みたいに緊張している。

このバリュアス国へ入国した時から懸念していたことが現実に起つてしまつた。

彼は、バリュアス国プロウフィッシュ王の側近であるこの氷のように冷たい表情をしている女性、ルリードのことを密かに想つていた。

ガルド会議が行われたバロゲニア神殿にある宿泊施設で、彼女に食事を作つたことがある。それはルリードへの気を引くために他ならない。

そんなグリークスの変化を感じかない者は1人もいなかつた。

「あの…グリークスさん? どうかしましたか?」

心配そうにオーフランドは顔を覗く。

グリークスは我に返る。

「えつ、あつ、ああ。彼女はルリードさんと言つて…」の國の王の側近だ…」

簡単に言つグリークスを全員が凝視した。とんでもない事態に陥つてゐることに気付かないのだろうか。

「ちよつ…グリークスさん、マズイじゃないですか」

ボズが小声で言つた。

ボズでさえ理解できる。王の側近といつ最重要の位置にいる者が目の前にいるのだ。ボズ達は城の中に不法侵入しているのだ。怪しいこと極まりない。

「何しにきた…」

ルリードは冷静に呟いた。すぐには捕らえるつもつはないようだ

つたし、彼女一人だけで全員を取り押さえるのは不可能だった。

あまりにも冷静なルリードの態度に一瞬の安堵感が流れる。

「正直に説明をしたらいいんじゃないですか。僕達は攻め込みにきたわけですから」

ルシアが言つた。ルリードがまずは聞いてくれると判断した上で意見だった。

「そ… そうだな。話をとりあえず、聞いてくれ、ルリードさん」

グリークスは両手を挙げて言つた。

ルリードはしばらく黙つていたが、「話せ…」と口数少なく言つた。

「俺達は、ルキボル国からアーガス国へ向かう途中だった。アリシエという女の子も一緒だったんだが、そこにいるクラウボという奴がアリシェと白い馬を誘拐したんだ」

グリークスはクラウボを指差す。クラウボは恥ずかしそうに下を向いた。グリークスは話を続ける。

「聞けば、この国へ送り付けたと言うじゃないか。俺達はアリシェを取り戻すために、やってきたってわけさ。ムトウつていう戦士に出会つて、赤い馬車が怪しいということになつた。その赤馬車はこの城へ到着したんだろ? アリシェの行方は赤馬車だと睨んでいる。ムトウの助けを借りてこの抜け道から侵入したんだ」

グリークスは本当に手短に説明した。

「ルリードさん、赤い馬車のことを知つてゐるのですか?」

ルシアが横から口を挟んだ。ルリードの表情が一瞬強張つたのを見逃さなかつた。あれだけ冷静な彼女が馬車の話をしただけで表情が変わる。何かあるとルシアは確信した。

グリークスがルリードを切望の眼差しで見つめる。確かにルリードへの恋心はある。しかし、今はアリシェを助けることが最大の目的だ。赤い馬車を探すことが大事なのだ。

「……知つてるわ」

ルリードは諦めたように溜息をついた。

ボズが慌てて聞く。

「そつ、その中に、アリシエはいるのー? お姉ちゃん」

「…………ええ」

ルリードの返事と同時にステューの刃と変化した腕がルリードの喉に突きつけられた。

「やめる、ステュー」

オーランドが止める。

「……どこだ」

ステューがルリードを睨む。ボズと同じくらいの子供とはいさすが暗殺一族の一人だ。息を呑むほどの迫力ある。

「この先にあるわ。だけど、もう誰もない。連れて行かれたわ」

淡々と話すルリードを見てステューの腕に力が入る。

「案内してくれないか」

グリークスがステューの腕を押さえながら頼んだ。

「一体何のためにアリシエを?」

ルシアが唐突に核心に触れる。ルリードはそこまで知っていると思つて いる。

「実験よ」

「実験?」

全員が口を揃えた。

ボズとステューの脳裏にある予感が走る。それも最悪の黒い予感。

「どんな……実験なんだ?」

グリークスが聞いた。

「…………の…………」

「え? 聞こえなかつた」

グリークスが聞き直そととした時。

「ふざけるなつ!」

ルリードの呴きに反応したのはボズとステューだった。思い出しあくもない出来事が2人の記憶を呼び起す。

そして、ルリードが呴いた言葉。

グリークス達が聞き逃した言葉。

その呪いの言葉をボズが代弁した。

「…絶望獣と…人間の…融合」

しんつと沈黙が全ての時間を止める。

「なんだと？」

時間を進めたのはグリークスの声だった。

「なんだよっ、なんの話だよ」

クラウボが訳のわからない顔でオロオロしている。

絶望獣。バロゲニア神殿を襲つた怪物。そんな怪物と人間…ア

リショを融合させる？ オークランドの頭は混乱した。

「僕の生まれたゲルニア国の王様だったセラミス王は、絶望獣ジャムと人間を融合させる人体実験をしていたんだ。それで作られたのが、強力な人間の意志を持つた絶望獣だった。セラミス王自身が絶望獣になつたんだよ」

興奮してボズが捲くし立てる。

「俺達一族がその人体実験の被害者だ」

ステューが怒りを抑えて付け加えた。

「そんな恐ろしいことを、ここで、しかもアリショにやうつとしているのか」

グリークスが初めてルリードを睨んだ。怒りに震えている。

「早く助けましょう」

ルシアが言い、全員が走り出そうとしたが、ルリードがそれを制した。

「行かすわけにはいかないわ」

「そこをどけ！」

「無理よ。私は、貴方達をこの先へ行かせないよう命令されているの」

ルリードはいつもの冷静さを取り戻していた。

「ふざけるな、こんな横暴をあんたは今まで見逃していたのか？がつかりだ、見損なつたぞ」

グリークスが叫び、ルリードの身体に掴み掛かった。

「無理なの。いくら間違っていると私が思おつと。無理なの。命令なの」

「…何を言つてゐる…」

「そういつ命令なの」

ルリードの悲しそうな瞳の奥の思いをグリークスは垣間見た。

「ま…まさか…」

「邪魔する者には…」

言いながらルリードが苦しそうに震えだした。

「そんな…」

ボズの驚愕の声。

「あ…ああ…」

ステューリーに蘇る悪夢。

「ひい…」

クラウボの恐怖の叫び。

「…」…これは、

オークランドが感じるルリードの悲しさ。

「畜生！」

何もかもを悟つたグリークスの悔しさの声。

「そうこうことですか。ブロウフィッシュ王国には逆らえない」ということ…」

「」の場で起こる出来事と、今までのルリードの言動で全てを理解できたルシアが言った。

ルリードの身体が変化していく。

かつてない絶望を生んだあの怪物に。

キシャアアアアアアアア。

ルリードは絶望獸へと変化していった。

つづく

グリークスがルリードを初めて見たのは、5年前のガルド歴905年バロゲニア神殿で行われたガルド会議の時だつた。

グリークスは重要な役回りではなかつたし、ルリードも王の側近ではなく、ただ連れてこられたというだけで、お互いたほど意味のある立場ではなかつた。

5年前のルリードは今と変わらず冷静な表情でその場にいたのだが、その姿にグリークスは一目惚れした。

グリークスが嫌々ながらも神殿の手伝いをずっと続けてこられた理由の1つとしてルリードに会いたかつたことが挙げられる。話すことはなく、見ているだけの存在。いつか言葉を交わすことを思い描きながら5年後、ようやく話しかけることができた。

しかし、5年という歳月は2人を成長させたと同時に2人の状況を一変させる。

グリークスは重要な仕事を。ルリードはブロウフィッシュ王の右腕として。

更に、父親殺しの犯人として無実の罪で追われる身になつたグリークス。幼い子を誘拐した国の疑惑を抱えて対峙するルリード。

1つの結論が出ようとしていた。

ブロウフィッシュ王がアリシェを誘拐させた真の理由。好色変態に相応しく如何わしい行為に走るわけではない。もつとタチが悪い。実験。人間と絶望獣の融合。それにより出来上がる「モノ」は。絶望獣の遺伝子を含んだ人間。圧倒的な力を持つた怪物。

ブロウフィッシュ王が実験に励んでいたのは、かつて滅亡したゲルニア国王セラミスが行つていた邪悪なる悪魔の所業。

その答えが、グリークスの目の前に、いる。

ルリード。

細く白い身体が、瞬く間に膨れ上がり、服が破れ、醜い姿へと変

化していく。

それこそ、古の怪物。絶望神メンデルゴスが操る化け物。絶望獣ジャム。

再び、絶望の獣は、目の前に現われた。

「……」

まるで蛇に睨まれた蛙のように、グリークスは動けなかつた。見たくない光景。見たくない現実。

好意を寄せていた女性が、絶望獣へと変化したのだ。言葉にならない。なるわけがない。

自然と身体震えだした。恐怖にではない。ルリードの姿に対しての悲しみの想い。彼女は望んだのか？彼女が目指した姿なのか？「グリークスさん、とにかくここから離れるんです」

オーランドが無理矢理グリークスの重い身体を引っ張つた。
「辛い気持ちはわかります。ですが、今は引きましょう。さあ、グリークスさん」

オーランドは必死で叫ぶが、声は届いていないふうだつた。
「ボズ、ステュー、早く」

思い出したくなかったのだろう。今までどんな困難にも勇敢に向かっていた2人は突然の出来事に思考回路が付いていていよいようだつた。

「……う……あ……」

「そんな……なんで……」

数々の修羅場を通つた2人である。時間をかけて落ち着かせれば対応できるが、今は一刻も速い行動が求められる。呆けている場合ではないのだ。

「くつ……ク……クラウボ！子供達を……」

こうなつたら頼りないがクラウボに応援してもらつしかない。オーランドはクラウボを探した。

だが、その考えは簡単に破綻する。

確かに小さな港の中で、自分が世界で一番だと嘯いていても、世に出ればこういった有り得ない出来事に出くわすこともある。クラウボにしてみれば、今回の一連の出来事は人生で初めての初体験近くの出来事だった。最後の最後で昔話で聞かされていた絶望獣の登場である。意識が遠のき気絶するのは至極当然であった。残された者は、後一人。ルシアだけとなつた。

オークランドはルシアの方を向く。

「ル…ルシ…」

呼びかけてオークランドは絶句した。

あの誰よりも冷静なルシアがその場で頭を抱えながら屈みこんでいる。

「ルシアっ？…どうしたんだ」

「う…。うつ…」

ルシアは苦しそうに唸つた。

「ルシア…？…ああっ！」

蘇るオークランドの記憶。

母国ルキボル国での記憶。

ルシアの身体に宿りし危険な存在。

ルシアは多重人格者である。それも2重いや3重人格。実に稀ではあるがそういった人間もいる。問題は、ルシアの中に棲んでいる人格が問題なのだ。

1人は、太陽の神、太陽神アルニヴァース。世界の人々が永遠の神として崇める太陽神の人格がいる。

やつかいなのはここからで、もう1人の人格は、絶望の神、絶望神メンデルゴス。かつて、太陽神と戦い敗れ封印された最凶の悪魔。その絶望神の人格。

ルシアという1人の身体に、太陽神と絶望神の2人の人格が宿つているのだ。これほど深刻でややこしい問題はない。

「ま…まさか…。絶望獣の出現で…」

オークランドは考えたくないことを思つた。絶望獣ルリードの登場で、ルシアの中にある絶望神の人格を触発したのではないだろうか。そうなると、絶望神の人格が現れる。

オークランドは絶望神ルシアの容赦ない攻撃を一度目の当たりにしている。人を人と思わず、まるで虫をあつさりと殺す程の残虐性。ここで絶望神の人格がルシアを乗つ取るのは致命的に等しい。

「うつ…うがつ…うがあああ

頭を抱えながらルシアが暴れだした。全身を痙攣させて地面をのたうちまわっている。ルシアの人格と絶望神の人格が戦っているのだ。

「ルシアっ、頑張れっ！負けるな」

オークランドには激励をかけるしか道はなかつた。

そして。

気付いた時には遅かつた。

絶望獣となつたルリードの鋭く大きな腕が、オークランド達全員を吹き飛ばした。

壁に激突したオークランドは崩れ落ちていく仲間達を視界に入れながら自分自身の意識がしばらくの間機能しないことを悟つた。

（第4章 ルリードの正体 終） 第5章に続く

冷たく、薄暗い部屋に少女はいた。

感情も出せないその少女は何もわからないままこの場所へいとも簡単に連れてこられた。

「…」

旅の途中で誘拐され、船に乗され、赤い馬車に乗されて、到着したのは城の地下。

少女はアリシェ。ボズやルシア達と一緒に旅をしていた。故郷のゲルニア国に突如として現れた絶望獣ジャムによって目の前で両親を殺された。その結果、アリシェは言葉と感情を失った。それでも幼馴染のボズはアリシェを助け、気遣い、いつか戻るかもしれないその感情を待っている。

ルキボル国でボズに見せた表情は治る前兆なのだろうか。水滴の音がやけに大きく響く。

アリシェは自分がこの場にいる理由も理解できないまま、その場に座り込んだ。

「くつそう！」

厚い鉄の扉をボズは力いっぱいに蹴った。…がびくともしない。逆に痛みが徐々にボズお足に伝わる。

「無茶は駄目だ、ボズ」

オーランドが止める。

バリュアス国ブロウフィッシュ王側近のルリードが絶望獣に変化したという予想外の展開。気絶させられ全員が今いる牢へ閉じ込められた。

救いだつたのはルシアの乱れを止めることができたからだ。絶望獣の出現でルシアの中にある絶望神の人格が覚醒しかけたのだった。

氣絶させられたおかげで止めることができた。

「このままだと、アリショウが！アリショウがあんな怪物にされちゃうよ！」

グリークスのルリードを想う心情からいえば、ルリードを怪物呼ばわりする言動は避けた方がよかつたのだが、今のボズにそんな気配りはできない。

それに嘘ではない。あの氷のように冷静で美しいルリードはおぞましく醜い絶望獣なのだ。

「まずはここから抜け出さないとな」

グリークスは呟いた。

「何か方法はあるんですか？」

オーランドの問いにルシアが答えた。さきほどの乱れはなく、いつものルシアだった。

「完全に密室にすると僕達は息が出来ません。つまりは空気口があるはずです。上を見てください。あの小さな穴がそうです」
全員が上を見上げた。確かに子供が入れるくらいの小さな穴がある。

「確かにあるな。だが子供しか入れないぞ」

グリークスはそう言いながら、ボズとステューを見た。

2人の子供は動じることもなかつた。むしろボズがやる気満々に立候補してきた。

「だったら、僕が行くよ。そこから抜け出表から鍵を開ければいいんだね」

ボズは顔を真っ赤にして喋る。一刻も早くアリショウを助けなければならぬ思いでいっぱいだった。

「お前はそこにいる。俺が行く」

ステューが横から口を出した。ボズが睨む。

「なんだよ！こっちが先だぞ！」

「穴から外に抜けるとして、もし敵がいたらどうする？鍵を兵士が持っていたら？俺の方がお前よりも対応出来る」

ステューは淡々と言つた。

「なんだと！僕じゃ無理だつて言つのかよ！」

「勘違いするな。お前が頼りないと言つてゐるんじゃない。そういう状況になつた場合、可能性として俺の方が早く対応出来ると言いたいんだ。今は一刻を争つ時だろ？」

「え…あ…ああ」

ボズは驚いた。ずっと自分を否定してきたステューがこんなことを言うなんて。長い旅でボズを見てきたステューの気持ちも変わってきたことと、アリシェを無事に助けるという目的は同じだからなのだろう。

「うん、僕もそれがいいと思つよ。頼む、ステュー」

オーネイランドを先頭に全員の意見が一致した。

「けつ、じゃあ、お前に任せよ。…気をつけろよ」

ボズの精一杯の気遣いに、ステューは誰にもわからない程一瞬笑みを浮かべた。

「お前じやないんだ、大丈夫に決まつてるだろ」

「…うぬぬ！やつぱ…こいつ」

ステューは身軽に飛んで穴の中へ入つていつた。

全員がステューを送り出していく場面を隅つこで見ていたのはクラウボだつた。

クラウボは後悔している。

バリュアス国に協力していたこと。アリシェを誘拐したこと。グリーケス達に捕まり、バリュアス国へ同行させられたこと。お尋ね者になり、追われる身になつたこと。見たこともない化け物に襲われ、今この場にいるということ。

…どれも違う。

根本的なことを後悔していた。

自分の生き方にである。

振り返れば、迷惑ばかりをかけていた。漁師をしてる親を否定し、赴くままに好き勝手生きた。その結果がこれだ。

父の手をちゃんと見た事があつただろうか。大きくて傷の多い手。誇りを持つて生きている親の顔をまともに見れなかつた。見たくなかつた。逃げていた。

ここにグリーケスはどうだ。こんな状況でも諦めずにアリシェを助けようと努力している。自分よりももっと若い子供までもが。クラウボは覚悟を決めた。生まれて初めて本気で心の底から決めた。自分で撒いた種だ。自分がやつたことだ。最後にケツを拭くのも自分の責任だ。

クラウボの内に秘めた思いが気持ちを高めた。

つづく

バリュアス国の大兵ハンスは牢の見張りを命じられていた。

噂になっていた侵入者をプロウフィッシュ王の側近ルリードが捕らえたということで牢に閉じめることになった。

牢の扉は頑丈で、壊すことなどは簡単に出来ないし、施錠もしっかりとしている。

万が一ということがあるかもしれないでのハンスは見張っているのだった。

ハンスはあまり噂を気にする男ではない。プロウフィッシュ王の怪しい奇行に対して戦士であるムトウが疑問を抱いているという話は聞いていたが、ハンス本人はなんとも思っていない。そんな噂勝手に想像して、という勢いである。

一瞬、空気口の小さな穴に影が見えた。

見間違いかと思いながらハンスはその空気口へ足を向けていた。そんなはずはないと心中では思っていても、実際空気口は牢の方にも繋がっている。

不安を感じながらゆっくりと近づいていく…。
やがて。

不安は見事に的中した。

子供の頃から変だと感じた時には必ず悪いことが起きていた。一種の予知能力とでもいうべきだろうか。とにかく不安を感じたら間違いなく何か悪いことが起きる。

空気口から男の子供が飛び降りた。

牢の中にいる一味の一人、ステューだった。

ハンスが声を出す前にステューが懐に飛び込んできた。気付いた時には、ステューの当て身がハンスの意識を奪つた。ハンスはこれから起こるバリュアス国最大の事件に触れることなく倒れた。意識を取り戻した時どう思うのだろうか。それは本人し

かわからない。

ステューはハンスの持っていた鍵を取り、いつも簡単に牢の扉を開けた。

同時にボズが飛び出した。

「いくよー早く！」

何処に行けばいいのかわかつていないが、気が氣でならない。それは皆同じ気持ちである。

「落ち着けボズ、まずこの場所を把握しなければ…」

オーランドの意見を無視してボズはウロウロしている。ここで別の兵士に見つかると大変なことになるため、ボズの行動は危険極まりない。

「オーランド、今のボズは誰の声も聞こえないぞ」

諦めたようにグリークスは言つ。

「ここは、もうボズに任せんしかないですね」

ルシアが言つ。

勘を頼りにどんどん先へ進むボズの後を皆が付いていった。

「ぶわつはは」

プロウフィッシュ王は満面の笑みを浮かべていた。決して美しい笑顔とはいえない。

大臣が現れて、プロウフィッシュ王に耳打ちした。

「準備が整いました」

ますますプロウフィッシュの顔が醜く歪む。

「そうか、そうか、じゃあ、行くかの」

プロウフィッシュは立ち上がった。隣で佇んでいたルリードを見て叫ぶ。

「ルリードー、ムトウの奴は捕らえたか？！」

「いえ。まだです」

「むうつ。アルヴァーーのボケは何をしておるんだ！」

鼻息荒く、プロウフィッシュは何度も地団太を踏んだ。

「それと、例の実験台の仲間を牢に入れたと聞いたが？」

「はい。問題ないかと思います」

「ふん。まあいい。とにかくいいぞ。ルリードお前も来い」
プロウフィッシュは歩き出した。アリシェがいる場所へ。

ルリードも無言で歩いていた。

ルシア達が城への抜け道を使って入った場所からムトウも忍び込んだ。

人の気配がしない。シンッと静けさが不気味に感じじる。
ルシア達は無事だらうか？アリシェを助けることが出来たのだろうか。

辺りを見回していると、プロウフィッシュ王とルリードが通り過ぎるのを見た。ムトウは思わず隠れる。
あのニヤけたプロウフィッシュの顔を見るとアリシェはまだ救われていないことを悟る。

つまり、プロウフィッシュ王の後に續けば、アリシェの所に辿り着くということになる。

ルシア達がいないのが気がかりだが、今はアリシェを助けることを最優先にするしかない。

ムトウは気付かれないよう、元へ後をつけた。

「王はどこにいったの、さ

城に戻るやいなや、顔を腫らしたアルヴァーーは大臣に詰め寄つた。

ムトウに殴られて倒された。アルヴァーーは怒っていた。ムトウ

とアルヴァニーの闘いは顔を殴ることは法度だったのだ。

ムトウはそれを裏切つた。見事にアルヴァニーの顔を両掛けで重い一撃を食らわしたのだった。

アルヴァニーの怒りはおさまらない。ムトウにしかるべき報いを。そこに幼馴染という感情は存在しなかつた。

王の行動を疑っていたムトウは必ずブロウフィッシュ王のいるところに向かうはずだと推理したアルヴァニーは王の所存を聞きだそうとしていた。

「た……確か……地下へ……」

アルヴァニーの迫力に大臣は簡単に口を開いた。所詮王への忠誠心などそんなものだつた。

「地下?なぜ地下なんだ、さ」

アルヴァニーは地下へ向かつた。その瞬間、ムトウが抱いていた不安な疑惑が脳裏を過ぎつた。

つづく

重い扉が勢いよく音を立てて開かれた。

誰もが驚く音であつたが、中にいたアリシェは聞こえていないのか、意識が別世界へ向かっていたのか全く動きもしなかつた。

ブロウフィッシュ・シユ王はイヤラシイその顔をアリシェに向けた。

「おう、おう、おう。大人しく待つていたのかあ、良い子じやのう、ふわっははは。久しぶりの実験体じやのう」

耳に入れば誰もが背筋に寒気を帯びる声もアリシェには聞こえない。ブロウフィッシュ・シユにとつてそれは好都合であつた。

泣き叫ぶのか当たり前の状況で感情も出さない者ほどやりやすいことはない。ましておぞましい実験台に使うのだ。

地下の部屋には、肉片が入っている大瓶があり、その瓶に管が取り付けられている。管の先は人が1人入れそうな筒状の箱に繋がっている。

箱の中に実験台となる人間を入れ、禁断の融合呪文を唱えることにより、人間と絶望獣の融合を完成させるのだ。肉片とは絶望獣の一部だつた。

かつて、今は無き北のゲルニア国の王セラミスが用いた方法だつた。

セラミスの所業は有名で、どのようなやり方で実験を行つていたのかなど簡単に手に入れることの出来る情報だつた。

方法さえわかれれば、あとは一国の王である、準備などに時間がかかるはずもない。

「さてえ…」

ブロウフィッシュ・シユはにやついた。

「ルリード、準備をせい」

その場に無言で立つていたルリードに命令をした。

ルリードはしばらく動かなかつたが、やがて準備に取り掛かるう

と足を動かした。

その時。

「そ……そんな……馬鹿な……」

聞き覚えのある声が響いた。

「……」

ルリードは静かに振り向く。

「ああ～ん？」

ブロウファイッシュも怪訝な表情で同じように声の方向を見た。

「……王、本当だつたんですね……」

声の主は、後を付けていたムトウだった。

「ぶわはは、ムトウか、今更ノコノコと何をしにきた

ブロウファイッシュの叱咤が飛ぶ。

「王、あの少女を使って何をしようとしていたのですか」心なしかムトウの身体は震えていた。怒りを抑えているかのようだ。

「ぶわっははは。なんでもない、ちょっと遊ぶだけだ」

ムトウはブロウファイッシュの一言一言に頭の血管がピクピク脈打つを感じた。

「遊ぶ……？」

「実験だよ、実験。未来を見据えた実験じゃよ、ぶわっははは」愉快にブロウファイッシュは笑つたが、一瞬で真顔に戻つた。

「それで?まさか邪魔をするとか言つんじゃないだろ?うな?ムトウ

よ

ムトウは我慢の限界だった。

「……けるな!」

「は?なんじや?ムトウ?」

「ふざけるなあつ!」

ムトウは叫んだ。叫びながらブロウファイッシュに殴りかかつていった。

「おひ、おひ、おひ、おひ、」の王であるワシに殴られたのか、ムトウ…」

プロウフィッシュは馬鹿にしたように襲い掛かるムトウに満面の笑みを浮かべる。

「こいつ一ケダモノめ！」

ムトウは人生で最大で最高の渾身を込めた拳を我が國の王に食らわせる覚悟を決めた。権力と肩書きだけで國の王として君臨していた浅ましき人間にどんな力があるというのか。

ムトウは一撃でプロウフィッシュを倒すことを悟る。ルリードはその後だ。今はどちらに付いてるのかわからないからだ。

「ところで、言つておかなかつたがな、ムトウ。ワシには奥の手があつてなあ」

プロウフィッシュの両手が突如怪しく輝いた。

瞬時にムトウは理解する。その輝きはなんのかを。魔法の輝き。それも攻撃魔法。一体どこで覚えていたのだ。覚える余裕はなかつたはずだ。しかし、その事実をムトウは受け入れるしかなかつた。

両手の灰色の輝きは衝撃波の魔法。プロウフィッシュは両手を迫り来るムトウにかざした。本来この魔法は非常に鈍く発動したとしても簡単に避けられるだろうが、ムトウが一直線に向かってきてる今、避けられる要素はない。

「自分から来るとはのおへ

プロウフィッシュの憎悪詰まつた両手から強烈な衝撃波が出された。

ズドン。

衝撃波はムトウの身体に命中して貫いた。

「ぐはあつ！」

勢いでムトウは吹っ飛び壁に叩きつけられた。

「悪かったなあ～ムトウ～。ぶわっははは」

ムトウの意識は失つていた。

プロウフィッシュは続きを始めようとアリシエの方を向いたが、すぐに溜息をついた。

「なんだ、今度はお前か…」

田の前に立っていたのは。

ムトウを探していたもう1人の戦士、アルヴァニーだった。

「どういうことですか、王。ルリードさん。どういうことなんですか、セ」

真っ青になつてアルヴァニーは言った。

ブロウフィッシュは両手を再びかざしながらアルヴァニーに向かって歩き出した。

つづく

「どうじゅうことなんですか？ブロウフィッシュ王？！」

アルヴァニーは叫んだ。混乱している。

ムトウを探しにここまで来た。ようやく見つけたかと思つたら、ムトウはブロウフィッシュ王に殴りかかっていた。

それだけではない。そのムトウを手加減なく吹き飛ばした王。確かにムトウの行動は尋常ではなかつた。ブロウフィッシュ王があしなければ逆に大変な目にあつていたのは王の方だつただろう。しかし。冷静に立つてゐるルリード。呆けた表情でただ座つてゐるアリシエ。部屋の中の奇妙で怪しい実験道具。

部屋の雰囲気と状況がそうではないことを物語つていた。決してムトウは我を失つておこした行動ではなかつた。むしろ、王のこれからするべきことが、人の道から外れているのではないだろうか。幼い少女。実験設備。想像もつかない。なにも思いつかないが、異様な雰囲気を感じていた。

「なんだ、アルヴァニー。なにか用か？」

ブロウフィッシュは巨体を揺らしながら近づいてきた。

「お…王、これは一体…なんなのですか、さ」

近づいてくるブロウフィッシュに動搖しながらもアルヴァニーは冷静さを保つように努力した。

「なあに。見てわかるだろうが、反逆者のムトウを捕まえただけだ。お前はムトウを牢獄に連れていけばよい」

醜い顔と臭い息を発しながらブロウフィッシュはにんまりと笑つた。その迫力は背筋に緊張がはしると同時に、アルヴァニー自信の身の危険を察知する程だつた。

「だ…騙される…な。ア…アルヴァニー」

ブロウフィッシュの攻撃によつて吹き飛ばされ、壁に激突したはずのムトウの声が響いた。まだ意識はあつたのだ。

「ムトウ」

「良く見るのだ…そして感じるんだ、アルヴァニー…。この…状況を。お前ならわかるはずだ」

それはアルヴァニーが疑問に思つていたことの全てだつた。同じことをムトウは言つているのだ。

プロウフィッシュ・ショウ王の禁忌。実験。それは。幼い少女を使ったおぞましい真実。

アルヴァニーの動きは素早かつた。プロウフィッシュの横をすり抜けてアリシェの方へ向かう。プロウフィッシュの贅肉の塊である身体はアルヴァニーの動きについていけるはずはなかつた。

「アルヴァニー！貴様までもが、裏切るというのかあ！このクソガキめえ！」

プロウフィッシュの叱咤。

お構いなしにアルヴァニーはアリシェを抱きかかえた。

「ルリイードオ！」

プロウフィッシュの叫び声によつやく沈黙のままだつたルリードが動いた。美しく細い身体はしなやかに、そして軽やかにアルヴァニーの前に立ち塞がる。

「その子を離しなさい」

氷のルリードといふ言われるだけの冷ややかな声がアルヴァニーに突きつけられる。

「…いくらルリードさんの頼みでも、さ。こればかりは聞けないです」

アルヴァニーは身構えた。実際、アルヴァニーに頭にはルリードのことは何とも思つていなかつた。側近といつても軍事の戦力ではなく、政治の方で野戦力としてだ。闘いに入ると男と女。どちらが有利かは自ずと見える。それはムトウも同じ考え方であつた。

結果。その考えは。甘かつた。

「ぶわっははははあ！見せてやれいルリード。お前の本当の姿をあ

！」

「えつ？」

勝ち誇ったプロウフィッシュの宣言にムトウとアルヴァニーはほぼ同時に声を出した。

ルリードは静かに目を閉じて、精神統一を始めた。段々と苦しい表情に変わっていく。

びびびつ。

ルリードの衣服に亀裂がはいる。筋肉が膨張している証拠だった。

「なつ…なんだ」

筋肉の膨張だけではなかつた。ルリードの身体 자체がありえない程の大きさに変わっていく。美しかつたあの容姿の面影は全くなくなつていた。

「そ…そんな。こんなことが…」

何倍にも変化していく。ルリードの身体が。神話の伝説である怪物の姿に。絶望の獣。絶望獣ジャムという姿に。

「ぶわつははは。我が実験の最高傑作ルリードよ！あの裏切り者を抹殺せよ…」

プロウフィッシュの号令が下つた。変化が完全に終了したルリードはプロウフィッシュの命令が聞こえているのだろう、しつかりとした視線でアルヴァニーを睨んだ。

アルヴァニーはアリシュを離して距離をとつた。巻き込まれて被害があると困るからだ。そして戦闘態勢に入る。例え相手が化物でも返り討ちにしてやると心の中で誓う。

「行けい！ルリード！」

キシヤアアアアアアアアアアアアアア！絶望獣特有の雄叫び。瞬間。絶望獣ルリードの動きがアルヴァニーの目にも止まらなかつた。

「まずいっ！逃げる！アルヴァ…」

ムトウが叫んだ時には、遅かつた。

アルヴァニーの強靭な身体を持つてしても、絶望獣の太い腕に耐えることは出来なかつた。

防御も出来ないままに、アルヴァーは絶望獣ルリードの一振りを脇腹へとともに浴びた。

「がつ…」

息が詰まつたかと思うと唾液とは違つ粘つこい液体が口の中に溢れたことを感じ取る。胃液が逆流し、赤い液体も口から飛び出た。アルヴァーは吐血した。更にかつてない激痛が駆け巡る。感覺で肋骨が数本折れたのがわかる。折れた骨が内臓の何処かを傷つけたのか、口から出る血が止まらない。

「アルヴァーー！」

ムトウは叫ぶが、ムトウ自身もそう簡単に立ち上ることが出来なかつた。それだけブロウフィッシュの衝撃魔法の威力は凄かつたのだ。

「ぐつ…ぐつ」

アルヴァーの意思とは別に身体が動かない。痙攣して立ち上がることもままならない。

「ぶわっははは。やあ、ルリード、この逆賊達を始末せい！」

ブロウフィッシュの指示に絶望獣となつたルリードは言われるままの機械のようだつた。静かにムトウへ向かつて歩き始める。

ムトウは動けない。いや、動きたくとも動くことができないのだ。

「ぐつ…」

鋭い爪が振り下ろされた。

ズンツ！

無情にも死を呼ぶ絶望の爪は身体を貫いた。

『アルヴァー』の身体を。

「…！なつ…アルヴァーイイイイー…」

最後の力を振り絞り、アルヴァーはムトウの代わりに盾となつたのだ。

アルヴァーの口から更に大量の血が溢れる。絶望獣ルリードの5本の爪は心臓の位置を含めて正確に胸元を貫いていた。誰が見てもわかる。それが致命傷だということを。

誰が見てもわかる。それがアルヴァニーの最期だということを。

「馬鹿野郎！なんで！なんで！」

ムトウが呟く

「さあ、お前を信じていなかつた罰なんだからうなづけやつさ」

ア川元二一！」

「…わ…悪か…たな…さ…ムトウ…た…たかな…あんな怪物となつて…るが…ルリードさんは…悲しんで…いる。この身体を貫いた爪から…伝わつてくるんだ。ルリードさんの悲しみが…。ムトウ…ルリードさんを…助けて…やつ…」

「あつ……」
アルヴァニーに直撃した。アルヴァニーの身体は吹き飛んだ。

た。

「ふわー、はまはま。反逆者はいるなんのじゃあ！」

「とにかく強烈な程の声で怒鳴り立た上かNTTどすか立てない。立つことができない。悔しさが溢れ出る。死に逝く友に何も出来ずにいた自分自身に怒りがわく。

「ふわははは。そんなに悔しいのかあ~心配するな、ムトウ、すぐにお前もアルヴァーと同じ所に送つてやるわあ

「汝等」

ルリードは吠えた。ムトウへ凶器の爪が降りかかるうとした。

「やめるんだ、ルリー！アーヴィー！」

別の声。ブロウファイツ・シユの命令しか聞かない絶望獣ルリードの

「ぬう、お前…たしか…父親殺しの…グリークス上

プロウフィッシュの憎しみ混じった表情を出す。
その声は、グリーケスだった。

つづく

「…お前…」

ムトウが擦れた声で言った。

絶望獣となつたルリードの動きを止めた声の主。

グリークスだった。

「貴様あ…。よくもこのワシの国にノコノコと…徘徊にわづもりだ。この親殺しめ」

プロウフィッシュは睨みをきかせる。

グリークスの後ろから、もう一人。プロウフィッシュの見覚えのある人間の姿が現れた。プロウフィッシュは驚愕した。確かに今回実験台であるアリシエを助けにきた仲間がいることは聞いていた。しかし、その仲間がグリークスだとは思つていなかつた。更に、先のガルド会議で席を共にしたルキボル国王子オークランドだとは思つていなかつた。

「…オークランド…王子…。いや…今は、オークランド王か。先日のお家騒動大変でしたなあ。だが、なぜお前がここにいるのだ」
プロウフィッシュは怒りを交えてオークランドに一喝した。少し前のオークランドならば尻込みしていたはずだ。

ルキボル国内での戦争で王として成長していたオークランドは最早臆病で弱い男ではなかつた。

「今はそんなこと関係ありますか？プロウフィッシュ王。貴方は我々の仲間を誘拐し、如何わしい実験をしようとした。しかも知らぬと言つていた絶望獣までもこの場にいる。質問したいのはこっちの方です。これをバロゲニア神殿が聞いたらどう思うでしょうか」

軽く見ていたオークランドの脅迫めいた発言にプロウフィッシュは逆上した。

「それがどうしたあ！貴様らがここで死ねば問題なかろう…まあ、最も親殺しを引き連れている時点で誰も信じてくれないだろうがな

あ

そう言つてプロウフィッシュはグリークスを指差した。
「とにかくアリシェは返して貰つ。そして、ルリードを元の姿に戻す」

グリークスはプロウフィッシュを無視して言つた。

「ふわははは、やれるものならやつてみるがいい！ルリードオ！」
「いつらを皆殺しにしろお！」

プロウフィッシュは叫んだ。

ルシアとステュー、そしてボズは離れた場所で待機をしていた。

ステューは追つ手がきた場合にボズ達を守るため。

ルシアは前に絶望獣の影響で異変を起こしたために連れて行くことは出来なかつた。ルシアの身体に宿つている人格。絶望神の意識が現れるのだ。

「なんで僕は駄目なんだよ！僕だつてアリシェを助けに行きたいのに！」

ボズは悔しそうに言つた。

その横でステューが溜息をつく。

「お前を連れて行つたところで足手まといになるだけだ」

「なんだと！ルキボル国での勇姿をもう1回聞かせてやろ？」「

「聞き飽きた」

言い合いが酷くなる前にルシアが止める。

「2人とも、アリシェを助けに行きたい気持ちは全員一緒ですから。ここはグリークスさん、オークランドさんに任せましょう」
仕方ないとボズは誰かがないことに気付いた。

「あ…あれ？あいつは？」

「…クラウボク」

同じ様に気付いたステューも探し始めた。

「まさか逃げたのか？」

ボズは怒りを露わにした。

クラウボはグリーケスのいる部屋を目指していた。ルシア達から隙を見て離れたのだ。クラウボの目的は一つ。アリシェの救出だった。自分の責任でこうなったのだ。罪滅ぼしとしてアリシェを助けてみせる。その想いだけだった。

ボにはそこまでの勇気はない。それでも進む足は止まらない。

「どうした？ ルリー。」二つを殺せ。」

ブロウフィッシュの命令が部屋に響く。

異常が起きていた。绝望獣ルリードが命令に従わないのだ。全く動かない。

川口トモ久

ムトウは吸した。死に際のアハウスの言葉に当たっていた。

この「獣」という姿が彼女自身望んだ形ではない」とは明白だ。若い女性がおぞましく醜い姿になることがどんなに辛いことか。ルーリードは今、必死で自分の意思と絶望獣の意思との戦いをしているのだ。

「目を覚ましたくだれ！」ルリーちゃん！」

「黙れ！ムトウ！」

ブロウファイツショウの蹴りがムトウの腹を刺さる。

「はつ

「ぐぬぬ。ルード！ 何をしておる。ワシの命令が聞けないのか？」「こつらを殺すんだ！」

ブロウファイッシュの命々

「やめろー。プロウハイシシゴト」

のモノじゃ！

ブロウファイッシュが脂汗を出しながら抵抗する。

「心地悪がつて…」

グリークスが前に出た。

「ルリーデー。こんな変態野郎の所にいつもまでいる」とはねえ！

グリーケスがルリードに近づいていく。

ケリー・ケスさん！」

「黒鹿か！」の殺戮しか！「ソシのルリー」を助けるだとお？！」
ボン。

異変が起つる。

獣となつたルリードの目から涙が落ちた。

俺と一緒に来い！」

グリークス魂の、心の、叫び、想い。

誰の耳にもルリードの咆哮が悲しく聞こえた。

第5章 アリシェを救出せよ 終
第6章 につづく

当時のバリュアス国はまだ発展途上で裕福な者と貧困な者で分かれていた。貧しい者が食べていくには奴隸のようなことでもしないかぎり食べていけない。女性の場合は身体を売つて家族や自分を養つていく。

ルリードの母親は貧困の人間だつた。それも、母親として、決して良い母親ではなかつた。彼女も身体を売つていたが、それは快樂とその場しのぎの金が欲しいだけであり、妊娠がわかつても、子供を養つていくような経済力も常識もなかつた。自分のことしか考えない彼女はルリードを産み落とし、そのままルリードを売りに出したのだ。ルリードは親の顔も、愛も分からぬまま「物」として競売に出されたのだった。

運が良かつたのか、ルリードを賣つた人間は、何年も子供が出来ない貴族の老夫婦だつた。ルリードの名付け親である。子供のいなかつた老夫婦はルリードを買い、残り少ない人生の全てを懸けてルリードを愛した。その愛を受け、ルリードは2歳になり、これから の将来が幸せになるかのように見えた。

だが。

ルリードは不幸という運命から逃げられない。

老夫婦は会話する。

「最近物騒な事件が起こつてゐるそうじゃの」

「ええ、聞きました。子供を誘拐する事件でしょう。それも幼児ばかりを…」

老夫婦はスヤスヤと籠の中で眠つてゐるルリードを見る。

「ちょうど、あの子ぐらこの子供を…恐いのつ…」

「ほんとにねえ…」

瞬間、窓の扉が勢い良く開け放たれ、生温い風が部屋の中に吹き荒れた。

数人の男達が乱入してきたのだ。

今、まさに会話をしていたことが田の前で起りゆつとしている。

「ま…まさか…」

老夫婦は恐怖を感じた。

男達は真っ先にルリードの元へ向かつたのだ。

「やつやめて、ルリード」

「貴様ら！ルリードから離れるんじゃ！」

老夫婦の叫びは虚しく響き、男達の手により簡単に斬殺された。そんな騒ぎに起きることなくルリードは何も理解できていま誘拐された。

子供達の誘拐を指示していたのは、バリュアス国王プロウフィッシュだつた。

目的は、隠れた作業。暗黒の所業。それも興味本位での行動だつた。

絶望獣と人間を融合させる実験だつた。

物心つかない幼児にそれを施すことにより、本人も自覚がなく、従順な獣を作り上げるためだつた。

「ぶわつははは～。そこそこ集つたのう～。さてさて、それでは、やってみるとするかのう～。ぶわつはは～」

数多く誘拐した幼児の中で、絶望獣との融合に成功したのは…。ルリード唯一人だつた。

あるいは失敗してこの世からいなくなつた方がルリードにとつて良かつたのではないかどうか。

ルリードはプロウフィッシュの傍から離れることは許されず、城の中へ監禁されることになつた。

數年後

城内のある地下部屋

説拐事件に巻き込まれた全ての人間が呼び出されていました

「三」 いはこ そ

「河川印用」
三 これがにがん

全員に嫌な予感が走る。

部屋の隅に、少女がいた。

「そんな！」

「プロセスエンジニアリング」とは、プロセスの最適化や効率化を目的とした技術です。

金てを知る者はこれかどくいへどどなかか理解できる。

つまりは死刑宣告。

ルリード。

せわし 川口ト

闇たる體にベベ王の声

ルリードの幼い身体が反応する。
醜い姿に、
化け物に変化する。

二二

おやおぐたわー！用！」

「助けてください！」

命乞いする声を搔き消す程の咆哮

绝望獸と変化したルリードはその部屋にいる全員に襲い掛かつた。肉を裂き、骨を砕き、人としての原型など残らない無残な処刑劇。

この中にルリードを愛した老夫婦を殺害した者もいるはずである。皮肉にもこのような形でルリードは仇をとることになつていった。

気が付くとルリードは人の姿に戻つていた。

辺りは血の海で肉片が転がっていた。ルリードの身体も真っ赤に染まつっていた。

「ぶわっはは～。何とも美しいのう～ルリード。今日からお前がワシの側近だ。ワシの全ての世話をお前がするのだ、いいな。最初の仕事だ。お前がやつたその死体を綺麗に片付ける。それが終わつたらワシの部屋に來い。いつものように可愛がつてやる。ぶわっははは～」

ブロウフィッシュの笑い声が遠ざかる。

無表情でルリードはその場に立つていた。

後悔も、悲しみも、何も感じない。『氷のルリード』の誕生だつた。

つづく

ルリードの絶望獣化。

この誰にも知られない件によりルリードの位置は不動のものとなつた。

周りの田にどう映るつとも毎日のよつにブロウフィッシュ王の側にいるルリードを特別視しない者はいなかつた。

身の回りの世話から、食事の世話、夜の慰みまで常に一緒なのだ。実力があろうがなからうが無視できるはずはない。

日が経つにつれ、ルリード自身の力も確実についてきた。的確な指示と事前の準備、いつの間にかルリードに口を出す者は消えていつた。

それでも怪しむ者は出てくる。

なぜルリードが？…と大臣達は当然ながら発言する。訳のわからぬところから拾つてきた小娘がなぜ王の側にいるのだ。日々に否定的な批判は当たり前のように出てくる。実際の真実を知らない者からすれば間違いなく思うであらう。

後日大臣達は忽然とこの世から姿を消す。

前のように地下へ呼び出され、獣となつたルリードの圧倒的な力で殺されたのだ。

不満がある人間は王の力で謎の失踪を遂げる。最早完全に誰も言う人間はいなくなつた。

ルリードも何も感じない毎日が続いた。

日々の横暴な王の愚痴を聞き、それに返事をし、相槌を打ち、必要ならば用意する。そこには感情はない。何も考えずにただ遂行するだけでいいのだ。

虚しさも感じない。ルリードは文字通り「氷」となつた。

「初めまして！ムトウと言います！」

「アルヴァニーです。よろしくです、さ」

戦士の2人が挨拶にきた。

幼馴染だという2人のムトウとアルヴァニー。

ルリードの部下として最も近い立場になる。この頃の2人は運が良い事に王に対しても何の疑惑も湧くことはなかつた。

後、その疑惑によつて命を落とすことになる者もでるのだが…。

「……」

元気の良い2人を前としてもルリードは相変わらず静かだつた
「あ…あの…ルリードさん？」

「お…おい、怒つてる、さ。お前が変に明るいからだぞ」

「…つてそんなただの挨拶だぞ」

焦る2人を見てルリードは溜息をついた。

「怒つてはいない。元々こんな性格だ」

ルリードは冷静に言つた。

「えつ、あつ、はい、どうも、よよよ、よろしくです」

「すみません、ルリードさん。とにかく頑張ります。よろしくお願
いします、さ」

「……」

ルリードは何も言わずにその場から消えた。

ムトウとアルヴァニーはお互に顔を見合せた。

「噂には聞いていたが…。なあ、アルヴァニー」

「ああ。こ…恐いなあ…ルリードさん」

ムトウとアルヴァニーのルリードに対する最初の印象も「氷」だ
つた。

そんなルリードの氷の心を溶かすものは出でへる」とはないと思
つていた。
しかし。

現れた。

バロゲニア神殿で。

ガルド会議に。

ルリードのために料理を作ってくれた男性。緊張した面持ちで差し出してくれた。

バロゲニア神殿の大神官の息子にして、大神官デスペラード殺害の容疑で追われて現在逃亡中の男。

今日の前で絶望獣と化したルリードに呼びかけている男。グリークス。

気持ちのこもった料理を食べた彼女には一つの確信があった。

大神官殺しは絶対にグリークスではない。

王には言えない確信。

自分の中だけの確信。

それは揺らぐことのない確信。

国へ帰る途中もふとした時に思い浮かべるのはグリークスであり、グリークスの料理だった。

心を閉ざしたルリードに差し延べる光の手。希望の手。

グリークスの一言が氷の心を溶かす。

なによりも自分のことを大事に想う叫び。

『俺と一緒に来い！』

ルリードの心の暗闇に響くグリークスの言葉。込み上がる感情。

喜び、悲しみ、切なさ。

身体が震える。

キシャアアアアア。

咆哮でしか返事が出来ない。

返事は1つ。

一緒に行きたい。

）

第6章

ルリードの過去 終

）

第7章につづく

ボズとステュー、そしてルシアに緊張が走った。

奥の方、グリーケスとオークランドが向かった方から聞き覚えのある叫びが聞こえたからだ。

キシャアアアアア。

絶望獣の咆哮。それは、ルリードのものだということは容易に想像できる。

しかしながらルシアの緊張とは別に高まる別の緊張感がボズとステューにはあった。

絶望神の人格がルシアの身体の中に宿っているために、絶望獣事態の影響でその人格が目覚めやしないかと2人は思っていた。現実的にそういう予兆があつたからルシアは離れた場所にいるようになつてているのだ。

「今のは…」

何事もないかのようにルシアは咆哮がした方を向いた。

ボズは恐る恐るルシアの表情を窺いながら喋つた。

「う…うん、グリーケスさんがいる方だ。しかも、あの声は…」

「絶望獣」

続けてステューが言った。

「大丈夫かな…」

ボズが心配気に言う。グリーケスやオークランドのこともだが、何より心配なのはアリシェのことだった。

「僕達が今出来ることは、グリーケスさん、オークランドさんを信じることだよ、ボズ」

ルシアがはつきりと言った。絶望獣の影響など全く感じられなかつた。

「2人がアリシェを連れてきてすぐに逃げれるように逃走経路を、つまりこの場所を確保することが大事だよ。気持ちはわかるけどね」

ルシアはボズとステューを見た。ボズは頷いた。ステューは何も言わなかつたが、ボズと同じ思いだらう。

それにしても、絶望獣に対しても影響のないルシアがボズには不思議だつた。前は気を失うほどに苦しんでいたはずなのに。そういえばわざわざの咆哮は心なしか哀しそうにボズの耳には聞こえた。

ルシア達の目を盗んでその場から抜け出したクラウボは遅れてグリークスが向かつた部屋へ走つていた。

なんとしてもアリシェを助ける一心だつた。

今回の原因を作つた責任を取るつもりだつた。

アリシェを誘拐さえしなければ、こんな所に連れてこられて、危険な目にあつ必要はなかつた。

いや。自分のことではない。自分のやつていたことに憎しみを感じる。2度とこんなことはこれからしないだらう。真つ当に生活をすることをクラウボは心に誓う。

その前に、アリシェだけは必ず助ける。クラウボは決心していた。部屋に目の前まできた時に、グリークスの怒りの声が聞こえた。「ルリード！ こんな変態野郎の所にいつもまでいることはねえ！ 戻つて来い！ 僕がなんとかしてやる！ 僕がお前を助けてやる！」 かつてない程のグリークスの怒りが伝わつてくる。

グリークスが絶望獣となつたルリードに歩み寄り始めた。

「グリークスさん！」

オーランドが止めに入つたがグリークスには聞こえていない。

「馬鹿が！ この親殺しが！ ワシのルリードを助けるだとお？！」

ブロウフィッシュユ王が顔を真つ赤にして怒鳴つた。

「俺と一緒に来い！ ルリード！」

グリークスがルリードに手を差し延べた。

獣に言葉がわかるものか。クラウボは内心思つた。

だがこの絶望獣ルリードの叫びは獣の叫びではない。人として、人間としての、哀しさをのせていた。

クラウボの視野にアリシェの倒れた姿が入った。

アルヴァーーーが助けようとしたが、ルリーーーーと一緒に吹き飛ばされたのだった。多少の傷は負っているようだったが無事に見えた。

既にほいかなにれば、瞬間はぐ二古の肌裏はせり替わるが

なつた。絶望獣としてプロウフィッシュの命令は絶対である。今まではそんなことなかつたのだ。それが初めて機能しなくなつてゐる。プロウフィッシュに怒りと戸惑いが表情に表れた。

ノリトトリノリトトリ

グリークスは叫ぶ。今の反応を見て悟った。絶望獣の力と争つて苦しんでいる。ルリードは勝てる。ルリードの意識が闘っているこの時が絶好の機会なのだ。

回復魔法とかで」

「む…無理です、傷や病気の手当などは僕の専門ですが、この状況は元の姿に戻すことですから…専門外です」

「へんつ、どうすればいいんだ」

「ひょっとした」…

オークランドが閃いた。

「ルギボル国でルシアに絶望神の人格が現れた時、どうしようもなく手が付けられなかつたのですが、意識を失つたんだす。そうなると次に目が覚めた時には元のルシアに戻つていきました。

とこゝことば…」

「氣を失わせればいいってことか」

グリークスが後に続いた。

「ええ、恐らく。でも…どうやつて…？」

オーランドが困ったように言つた。ルリードは動きを止めているが、恐ろしい力を持つた絶望獸である。簡単な攻撃で氣絶させることなど出来るわけがない。

「ま…任せろ」

グリークス達の会話を聞いていたムトウがヨロヨロと立ち上がつた。

「ムトウ」

「」の渾身の拳を、ルリードさんの鳩尾にでも喰らわせれば、意識くらにはなんとか出来るかもしね。ただし、1回が限度だがなムトウの提案に賭けるしか術はない。だがプロウフィッシュが黙つて見ているはずはなかつた。

つづく

ムトウが立ち上がったのを当然の如くプロウファイッシュが見逃すはずはなかつた。

「むう！ムトウめ、何をする気だ！何をしようともやらせはせんぞ！」

プロウファイッシュは睨みながら身構える。何をするのかは想像でわかる。腕っぷしの強いムトウの拳でルリードを氣絶させるつもりなのだ。確かにルリード自身の意識がとべば元の姿に戻るであろう。させてなるものか。プロウファイッシュはムトウ達の動きを凝視した。フラフラとムトウはルリードを見据えた。その身体をグリークスが支える。とても力を出せるようには見えなかつた。

「待つていてください。ルリードさん。必ず…元に戻してみせます」

ムトウは呟いた。

「大丈夫かムトウ？」

心配そうにグリークスが尋ねる。

「も…問題ない…早く、ルリードさんの傍に連れてゆけ」

ムトウは厳しそうな表情で答えた。問題があることを物語つくる。ムトウの身体がもつのかどうか。

「…ふん、やはりルリードの氣絶させるためか」

プロウファイッシュは笑みを浮かべる。今なら簡単に迎撃できる。まともに動けないムトウはグリークスの支えがないと動けないのだ。そうなると目標は遅い。プロウファイッシュの衝撃魔法でも充分当てることができるはず。

プロウファイッシュの両手が灰色に輝き出した。

「ぶわっはははは、死ぬがいい、ムトウ」

プロウファイッシュは狙いを定めた。

刹那。

一つの影がプロウファイッシュの目に入った。

人だ。ムトウとグリークス以外の誰か。オークランド?いや違う。グリークスの方からの動きであれば嫌でも早く目に入る。予想外の場所からだ。まさか、奴らの仲間かっ!

「誰だ!?」

プロウフィッシュは叫んだ。

影の正体は男。それも向かつてている方向は、少女アリシェの方。

「クラウボ!」

グリークスの声。

「ぐつ、仲間か!」

プロウフィッシュは2つの選択を余儀なくされた。

クラウボは覚悟を決めて走った。

目指すはアリシェ。必ず助ける。今なら助けることが出来る。プロウフィッシュの意識がグリークスへ向いているこの隙が機会だ。グリークス達の危機を見捨てるわけではないが、何かの犠牲は仕方ない。冷酷なようだが、クラウボの優先はアリシェの救出だつた。自分の汚点。償い。アリシェを助けることが、生まれ変わることだと思つていた。

あと少し。あと少しでアリシェに届く。

「クラウボオオオオ!」

グリークスの今まで聞いた中で一番何かを予感させる叫びだつた。

それも嫌な予感を。

クラウボは驚愕した。

プロウフィッシュの手から放たれた衝撃魔法がアリシェに迫つて

いた。

「!」

2つの選択肢からプロウフィッシュはクラウボ、アリシェを選んだ。ムトウとグリークス達は動きが遅い分いつでも始末できる。動きではクラウボの方が早い。攻撃をするならクラウボ達。遅い衝撃

魔法ではクラウボに当たることはできない。狙うなら、アリシェだつた。動かないアリシェになら狙いはつけやすい。

「ぶわっははは、死ぬがいい」

醜い笑いが辺りを包む。

クラウボは焦つた。このままでは間に合わない。衝撃魔法はアリシェに当たる。守れない。守ることが出来ない。クラウボの脳裏に言葉が蘇る。

何かの犠牲は仕方ない。

「……くそお！」

クラウボは力を振り絞つてアリシェに飛びついた。

クラウボの決死の覚悟だつた。アリシェを助ける。アリシェを守る。

そして、それは最初で最後の覚悟だつた。

「ぬあつ？！なにいいい！」

「クラウボ！」

プロウフィッシュとグリークスの声が同時に木靈する。

ズドン！

衝撃魔法はクラウボの身体に直撃した。

「ぐぼつ！」

玩具のようにクラウボの身体は弾け飛んだ。

壁に叩きつけられ、頭から地面に落ちる。クラウボは消えかかる意識を必死で堪えた。アリシェの姿を確認する。無事だ。無傷だ。

「へつへへ……」

心の底から喜びの笑いが漏れる。助けることが出来た。守れることが出来た。

クラウボは這いずりながらアリシェに近づいていった。まだ終わっていない。ここから逃げ出さないといけないのだ。

「うつうつ……に……逃げる……逃げるんだ……」

クラウボは座り込んでいるアリシェの手を握った。

「こんな所に送り込んで……わ……悪かったな……アリシェ……。でも安心

しろよ…必ず俺が…お前を逃がして…」

クラウボはもう2度と動くことはなかつた。だがそれは気持ちのいい程の安らかな顔だつた。

無意識にアリシェはクラウボの手を握り返していた。

「ぶ…ぶわ…ぶわっはは…焦らせおつて…」

プロウフィッシュユは安心したように言つた。

「さて、ゆつくりと料理してやるか」

プロウフィッシュユは再度衝撃魔法の準備をした。

瞬間、プロウフィッシュユに電撃が走る。

おかしい。おかしくないか？

グリークス、ムトウ、アリシェ、奴らの仲間、絶望獣ルリード、プロウフィッシュユ本人。

この場に足りない人物がいることに今気づいた。

ルキボル国王オークランド。

さつきまでいたはずのオークランドが見えない。

いや。よく見るといる。グリークス達の影に隠れて。何をしている。隠れる理由はなんだ？気付かれたくない理由はなんだ。

「ぬあつ！しまつたああ！」

理由がわかつた瞬間、プロウフィッシュユは口に出していた。

オークランドは医療大国ルキボル。王家の人間だけが出来る回復魔法がある。その回復魔法の準備を悟られないためにオークランドは隠れていたのだ。

「癒しの精霊、慈悲の精霊、我の声に応えよ生命の精霊、右手に宿りし希望の光よ、太陽神の名のもとに、今こそ、その力を大地に捧げよ…。回復魔法『サイツ』！」

オーケランドは素早くムトウに回復魔法をかけた。

完全回復には時間がかかるが、一瞬でも魔法を受けるとある程度の回復は見込める。

グリークスは力尽きたクラウボを見る。結果的にクラウボがブロウフィッシュの気を引いてくれたおかげでオークランドの魔法詠唱時間が稼げた。

「…ありがとう、クラウボ」
グリークスはそっと呟いた。

つづく

「そつそつはいくかあ！」

プロウフィッシュは重い身体を揺すりながら絶望獣ルリードの方へ走り出した。

オークランドの回復魔法でムトウ渾身の拳が炸裂すればさすがのルリードも倒れるだろう。しかもなぜかルリードは動くことすらしてないのだ。

クラウボを葬るために衝撃魔法を発動させたばかりのプロウフィッシュは続けて同じ魔法を発動させる力はなかつた。

「ルリードはワシの物じやあ！ 貴様らなんぞに……っ」

「遅かったようですね」

ルキボル国の人と呼ぶにはまだ幼さが見え隠れするオークランドの笑顔がプロウフィッシュの耳に入る。

「ぬあつ……」

「回復は完了です。なにも全快させる必要はないのです、プロウフィッシュ王。彼が一撃でも出す力さえ戻れば……ね」

オークランドの傍で溢れんばかりの力強い肉体を露わにした戦士が蘇える。

「うおおおつ！ ふつかあ～つ！」

戦士ムトウが立ち上がった。

「時間がねえ！ ムトウ！ 速攻でケリつける！」

グリーケスが叫ぶ。ルリードは今、絶望獣という狂氣と、本来の人間として、女としての理性とが戦っているために、動きが止まっている。ルリードも頑張っている。今この時が勝機なのだ。

「任せとけ！ ルリードさん、お許しを

ムトウは構える。

「ぐおあ～させるものか！」

プロウフィッシュの横を素早くオークランドが駆け抜ける。魔法

発動のせいか少し疲労を感じさせた。

「なにいい！」

オーランドの行く先はクラウボが自分の命を賭けてまで守りきつた少女、アリシエ。

プロウフィッシュはダラダラと脂汗をかきながら、ムトウとオーランドを交互に見た。どちらを優先していいのか、瞬時の判断が出来ない。正確な判断など元々出来るような人間ではなかつた。

「きつ貴様らあああああああ！」

プロウフィッシュは絶望獣の咆哮に負けず劣らず大声で奇声を発した。

ムトウの精神統一が終わつた。

「おおおおおお！」

ムトウの周りの空気がほんのわずか歪んだ。全てを託したムトウの拳は見事にルリードの腹部に炸裂した。

「キ……」

絶望獣ルリードの姿が人間の姿へと戻つていく。ルリードの意識が失われたからだ。

「やつた…ルリード良く頑張つた」

「へへっ、どんなもんだ…あつ」

ムトウは目のやり場に困つた。絶望獣となつたルリードの衣服は破れていたのでルリードは裸だつた。

「…つて、いや、てゆーか、そんなつもりじゃあなくて、ルリードさん、ごめんなさい」

慌てるムトウと横目に、グリークスは崩れ落ちるルリードを支え、自分の羽織つていた上着をルリードの白く美しい身体に被せた。

グリークスは氣を失つたルリードを抱きかかえた。

「脱出するぞ！」

そう言つとグリークスは走り出した。

「あつ、ちょっと、待て！」

ムトウも後に続く。

その場に残されたブロウフィッシュは呆気に取られていたが、すぐアリシェのことを思い出してアリシェを探した。…だが、アリシェはいない。グリークスが走り出すよりも早くオーランドはアリシェと一緒に逃げ出していたのだ。

ようやく我に返つたブロウフィッシュの悔しそうな声が響いた。
クラウボの亡骸の傍に温かいぬくもりが残つていた。アリシエの
言葉に出来ない小さな想いがしつかりとクラウボの手の中に宿つて
いた。

「オーランドも薄情だよな、俺達を見捨てて先に逃げてるなんてよ。お前ルキボル国の王様だろ? どうなんだよ、そこんとこ」
ルリードを抱きかかえながら猛烈な速さ走ってるグリークスは嫌味を言う。

「僕は元々体力ないんですから、先に逃げて当たり前でしょう？現にこうやって簡単に追いつかれていますし。というか、僕の身分は関係ないでしょ。とにかく話しかけないでください。結構：疲れるんですから」

同じおりアリシユを抱きかかえていたホーケランエヌが、ついに言った。

「えつ？王様？ルキボル国の？え？え？ええ！？」

何も聞かされていなかつたムトウは驚きの顔をする。確かに身分は言つていない。名乗つただけである。

「あ～、もう一々の話は後でじましちつた。」

「来たあ～！！！」

遠くからグリーケス達が向かってきているのをボズは確認した。

「来たよ！ルシアさん！アリシェが見える！やつたあ！」
アリシェのことしか考えていないからなのか、驚異的な視力でアリシェの姿だけはいとも簡単に確認できた。

「ボス、ステュー、僕達も逃げましょう」

ルシアは言った。

「ルシア、ボズ、ステュー！逃げるぞ！駆け抜ける！」
グリークスが叫んだ。

「了解！」

ボズが答える。

全員が合流した。後は無事にバリュアス国から脱出するだけとなつた。

「逃げるアテはあるのか！」

ムトウの質問に自信たっぷりな顔でグリークスは言った。

「ある。アリシェが乗せられていた赤馬車だ」

「なるほど！それならこつちだ、ついてこい！」

ムトウが先頭に立つ。

「…ところで、オークランド、クラウボ…さんは？」
ルシアが聞いた。

「…残念ながら…アリシェを助けるために…」

言いくそにオークランドは答えた。

「そうですか…」

「彼のためにも、必ず全員生きて脱出しなければ」

オークランドは決意した。

「…そうですね」

ルシアも笑顔で返した。

「あつ、あれだ！あの赤いのだ！」

ボズが赤馬車を見つけた。幸い馬も元気そうだ。

「これは好都合だ。すぐ出発できるぞ」

グリークス達は飛び込むよつて乗り込んだ。

「おい、聞こえるか？」

ムトウの投げかけに耳を澄ます全員。

「…………」

まるで地響きのよつたの音は逃げてきた方向から迫つよつて聞こえてきた。

「追手の兵士だな。恐らくブロウファイッシュのやつていたことなど知らない、単に反逆者が逃げたとこの情報だけで動いている兵士だろ？」

「そんな解説はいいから、早く出発しようよー。」

ボズが突っ込みを入れる。

一瞬しんつと静まる。

「……誰が手綱をつかむんだ」

ステューが呟いた。

今までクランボの役だった。皆が顔を見合わせる。

「僕は追手をこの矢で撃退しないといけないから無理だよ」

ボズが口火を切った。

「……俺もだ……それと……アリシィの様子を見ないといけない……」

「はあ？ ステュー、お前何言いやがるんだ！」

ボズがステューに詰め寄る横でグリークスが言った。

「俺はルリードの看病があるから、無理だ」

「……そ、そうですか」

オークランドはここまではっきり自信持つて言わると句も言えなくなつた。

「じゃあ、僕がやりましょ」

ルシアが名乗りを上げた。

「大丈夫か、ルシア？」

「何とかやってみます。オークランドは何かあつた時に手当てをして貰わないといけませんから、手が空いてないといけないです。……となると僕しかいません」

「おしつ、話は付いたみたいだな」

「ムトウが元気良く言った。

「じゃあ、達者でな、頑張つて逃げ切れよ。…それと、グリークス、ルリードさんをよろしく頼むぞ」

「えつ？貴方は…？」

「オーランド」

聞くオーランドを頭を振つてグリークスが制した。

「ああ、任せろ」

グリークスにはわかつていた。ムトウが一緒に馬車に乗ることはないと。ムトウの覚悟は既にブロウフィッシュと対峙した時点決まつていたのだった。

「…ムトウさん！どこ行くんだよ！」

ボズが心配そうに言った。

振り返り、ムトウは笑顔を見せた。

「最後の、大仕事さ」

そう言つとムトウは追手の方へ向かつて走り出した。ムトウは我が身を犠牲に時間を稼ぐつもりなのだ。赤馬車が逃げ切れるようになつた1人で。それはムトウの死を皆の脳裏に連想させるには十分な行為だった。

「そんな！死んじゃうよー！ムトウさんー！」

ムトウの姿が小さくなり見えなくなつた。

「ルシア！出発だ！」

ボズの声を消すほどの大声でグリークスが号令を出した。

つづく

自らの命を捨てて突っ込んでいたムトウの姿を確認する暇もなく、ルシアが操る赤馬車は颶爽と城から飛び出た。

目指すは港だ。船に乗り込んで忌まわしきこの国から脱出する。それには追つ手を振りきるしかない。

別の道筋から別の追つ手が現れた。

「ちつ…しつつこいぜ」

グリークスが吐き捨てる。

城の門でブロウフィッシュが何やら叫んでいるのが見えた。

「奴らを捕まえろ！ ルリーードを取り返せ！ 早く！ 早く行くのだ！」

醜い巨体を揺らしながら叫び喚いている。

グリークスはブロウフィッシュを睨む。

「そういえば、ルリーードはワシの物だとか言つてたが…。残念だな、ブロウフィッシュ王。ルリーードは…」

ブロウフィッシュの耳には届くはずないが、グリークスはブロウフィッシュへ訴えかけるように言つた。

「俺の物だ」

オーランドが照れ笑いをする。ここまではつきりと気持ちを出でぐりークスが羨ましいとさえ思つた。

「追つ手がきたぞ」

外を見ていたステューが言つた。すぐにボズへ向き直る。

「この状況だと飛び道具しかない。全てはお前の腕にかかっているぞ。大丈夫か？ ボズ」

「任せとけって！」

ボズはステューの不安な言葉に、自信を持つて答えた。

「限りなく…不本意だが…」

「だから、お前はいつも一言多いんだよつ！」

ボズは弓を構えた。これまでの戦い、冒険で、弓に関してボズは

自信をつけ始めている。大事な人を守ることが出来始めている。今もそうだ。ボズの手にここからの脱出がかかっている。ステューの言葉には嘘はない。ボズの魂は燃え始める。

「ボズ、頼むぞ！」

オークランドが言った。

「任せますよ、ボズ」

遠くからルシアの声も聞こえる。

グリークスはルリードに気をとられすぎである。

「アリシェは俺が見ている」

ステューの一言にまたしても怒りを覚えつつ、ボズの身体はすうつと静かに冷え込んでいくのを感じた。

馬に乗った追っ手がくる。対してボズの矢の数は僅か8本。とてもじやないが足りない。ボズもそれはわかっている。

けれどボズには確信があった。勝利への確信。何も1本1本矢を当てて倒すことはない。

「いっくぞー！」

ボズはいきなり馬の足目掛けて矢を放つた。

矢は見事に馬に命中。体勢を崩した馬は倒れこむ。その後ろを走つていた馬が倒れこんだ馬に引っかかり同様に倒れる。更に後ろの馬が、その更に後ろの馬が、玉突きのように転がつていった。

「すごいぞ、ボズ！ やるじゃないか！」

オークランドが感嘆の声を上げる。

「へへっ」

ボズは完全に狙っていたことだつた。常に色々な状況を想像しどうするべきかを考えていた。取り柄は弓しかない。ボズはそのことを子供ながらに理解していた。

「いくぞ！ 連続攻撃だ！」

正確に馬の足を捉えて次々に倒し転がしていくボズの腕前に、追っ手の兵士は成す術もなかつた。

気が付けば、残り2本を残して、追っ手は全て消えていた。

「おっしゃあ！」

高らかにボズは叫んだ。

「なんだとお！」

ブロウフィッシュは追つ手が全員捲かれたという報告を聞いて怒鳴つた。

「じゃあ、ルリードは？ルリードはどうなつた？」

兵士は何も答えることができない。

行き先を見たものは誰もいないからだ。ルリードと一緒に逃げたのか、それとも途中で別れたのか、全員が追いつけることができなかつたために、その後の状況などわかるはずがない。

「ぐつ、ぐぬぬぬう…おのれ、親殺しのグリーケスめえ…。奴ら、許さんぞ、許さん！」

ブロウフィッシュは拳で力いっぱい壁を叩いた。あまりの強さに壁にヒビが入ると同時にブロウフィッシュの拳の骨にもヒビが入つた。

「港だ！着いたよ！」

ボズが嬉しそうに言つた。

無事に港に辿り着くことができた。

「見事な扱いですよ、ルシア」

ソックなくこなすルシアの手綱つぶりにオークランドは感心した。

「ありがとう、オークランド」

ほつとした表情でルシアも答える。

「よしつ、さつさとここからオサラバするぞ」

グリーケスは再びルリードを抱きかかえよつとした。

「いい…1人で立てる」

ルリードの目が覚めていた。

「え…あ、ああ、大丈夫か、ルリード」

「ええ、何とか…」

ルリードは頭を押さえながら立ち上がろうとしたが、裸の姿に気付いて動きが小さくなつた。グリークスのかけてくれた服を必要以上に握り締める。

「…これからどうするんだ？ま、まあ良ければ俺たちと一緒にこの国から出るのも選択の1つだ」

グリークスは緊張して話しだした。

「俺としたら、こんな国で利用されているよりも、俺達と一緒にだな…」

「わかった。一緒に行く」

間髪いれずルリードが返事した。

「え？あ、いいのか」

「そう言った」

「わ…わかった。じゃあ…行こ」

簡単な返事に拍子抜けをしたグリークスは調子を崩された。

「アリシエ、大丈夫かい？さあ、気をつけて…っておい…アリシエから離れるステュー！」

「別に言われるほどくつついでいいだろ」

「何を？！こっちから見るとくつつきすぎなんだよ」

いつものボズとステューのやり取りを受け流しながら、ルシアとオーランドが話している。

「ところでルシア、船の操縦だが、さすがに1人は無理だから、2人でやろう。グリークスさんはあんな調子だし」

「そうですね、わかりました」

船もクラウボが操縦していたので、結局は誰かが操縦しなければならない。

「皆さん、船に乗つて下さい。乗り次第すぐに出発します」

オーランドの指示でルシア達は船に乗り込んだ。出発する直前。

「ところで…」

ルリードはグリーケスに話しかけた。

「なんだ？」

「…私は物じやない」

） 第7章 華麗なる脱出 ） 終

第4部 想いは必ずその心に ハピローグ アーガス国へ辿り着いた者達

「ようやく着きましたね」

疲れきったオキュラスが目を輝かせて言った。

ルシア達がバリュアス国で大立ち回りをしていた頃、ハッシュ、ファミリストン、オキュラス一行は長い旅路を経てハッシュの故郷アーガス国へ辿り着いた。

目的地はハッシュの師匠であるクラシェイカ。現状報告とこれららの動きの指示を貰うために戻ってきたのだ。

「ここが剣の国アーガス…さすが最古の国だけあるな。立派な町だ」

ファミリストンが感心する。彼の国は遙か北の孤島ゲルニア国。国同士の格は天と地ほどの差がある。

「…そうか？ うるさいだけの町だ」

嫌な思い出でもあるのだろうか、ハッシュは淡々と答えた。

入り乱れた町の中を、込み合う人々を避けるようにハッシュ達は進む。

「ここだ」

ハッシュはある家を指差した。

「ここに師匠クラシェイカがいる」

ハッシュは家へ向かい扉を叩いた。

「師匠。ハッシュです。ただいま戻りました」

遠くから返事が聞こえる。

「おお、ハッシュがよく戻ったのう。まあ、入れ」

3人は家中に入つた。

「すまんの、腰が痛くて思うように歩けないんじゃ」

クラシェイカは腰をさすりながら、オキュラスとファミリストンを見た。

「ほう…彼らが、ゲルニア国の…」

「はい、その後バルゲニア神殿に行つたのですが、目的の人とは出
会えませんでした」

「そうか、ご苦労だつたな、だがゲルニア国でも見つけることがで
きなかつたようだな、ハッシュよ」

「えつ？」

クラシェイカの言葉にハッシュは動搖した。クラシェイカの指示
は英雄を見つけてくること。1つ目の指示はゲルニア国。2つ目は
バルゲニア神殿。

2つ目のバルゲニア神殿では見つけることができなかつた。だが
1つ目のゲルニア国は違つ。ハッシュはファミリストンという男を
見つけてきたのだ。

ハッシュは思わずファミリストンの顔を見た。

ファミリストンも不安な表情で返した。

オキュラスだけが、伝説の剣士に会えたという喜びの笑みを浮か
べていた。

（第4部 想いは必ずその心に 完）（第5部につづく）

第1-1回「ほれ話

皆さんいつもありがとうございます。
読んでなくてもありがとうございます。

さて…第4部終了です。…個人的な感想を言わせて貰えれば…。
長かった…。
とにかく長かった…。

しかも「第4部第2章を終えて」去年の10月20日くらいなので
すが、年内に第4部を終了させると書いています。
実際は…?

おいおい4月直前だぞ?

文章力の成長すらみられないのですが、なにより忙しくて、書く時
間が時間がなかつたんです。
この頃ちょうど転職して、その辺が理由なんですが、僕自身もスト
レスが溜まっていた時期でした。
楽しみに?待つてくれていた人には申し訳ありません。

恐らく今後もこのような感じになるかと思いますので、なるべく1
回の文章を長くするように努力します。

本編の話ですが、ルリードの正体。そして気になるグリークスの恋
心。

寄り道をしましたが、やつとアーガス国へ戻ることになります。
ハッシュュ達は一足先にアーガス国へ到着しました。

いよいよ第5部はハッシュュ達とルシア達が集合します。

ですがただ集まるだけではありません。

事件があります。加速度的にハッシュュ達とは別に争いも始まります。バリュアス国プロウフィッシュュ王の動向も気になります。どう絡んでいくのかはお楽しみください。

第5部開始は4月になるかと思います。

4月と言えば、この小説を書き始めて2年になります。

我ながら趣味で書いてるわりにはよく続いている方だと思います。

第5部のタイトルは決まっています。

「託される意志」

だいたい想像も付くかと思いますけど、なるべく更新早くできるよう頑張ります。

皆さまよろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5216c/>

七英雄物語 4

2010年10月8日15時58分発行